
Re:write

朝市深夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Re:write

【Nコード】

N4795T

【作者名】

朝市深夜

【あらすじ】

槍殻都市グレンダンの三王家がひとつアルモニス家に、前世の記憶を持ったまま生まれ落ちたツァンヴァレイ・アルモニス。

何かを守ることに喜びを見出す彼は、一体何を守ろうとするのか。

オリ主介入型。このSSは原作開始よりも大分前から始まります。

ARCADIA様で投稿させて頂いているSSの改正版です。

ありえない。

そうそれはありえないこと。

気が付いたら赤ん坊になって、ヨチヨチ歩きをしていた。

赤ちゃんプレイとかそんな変態染みたものではなく、大の大人から小さな赤ん坊へと姿が変わっていた。

けれど元大人だった俺には臍気ながら今までの記憶があつた。

魂が彷徨い、再構築されていく様。

子宮の中から身体が作られて行く様。

子宮口から這い出て産声を上げる様。

姉が生まれてきた俺を見下ろす様。

この身体で生まれてきた軌跡を確かに覚えている。

だからどこぞの探偵のように、怪しげな薬を飲まされた、というオチはない。

ただ単に寝ぼけていたようなもの。

意識が覚醒せずに、まどろみの中に身を委ねていた。

本能のままに生きていたが、夢の終わりのように唐突に意識が覚醒し、現実には直面した。

鏡に映る自分の姿を見て啞然としたのは、今もなお俺の記憶の中に鮮明に残っている。

全くと言っていいほど、以前の自分に似ていない容姿。

唯一の類似点を挙げれば、この黒の髪色ぐらいだろうか。

あからさまに彼我う人間へと豹変して、身体が縮んでいたからこそ、俺は簡単に現実を受け入れた。

転生。

もしくは生まれ変わり。

そういう現象に自分が直面してしまったこと。

前世で世界と世界を移動し、怪獣大戦争に参戦してしまった身として、摩訶不思議現象は二度目。

だからこそ、二回目の今回に驚きは少ない。

むしろ、俺が文字通り命を捨てて守った少女は、あの怪獣大戦争を生き延びたのか。

そっちの方が気になった。

所詮こんなのは精々がまた厄介事か、程度にしか思えなかった。

移動要塞都市、通称レギオス。

退廃した世界の中で唯一人間が生活できる場所。

その数あるレギオスの中の一つ、槍殻都市グレンダン。

グレンダンを統治する三王家が一つに、男はツァンヴァレイ・アルモニスとして生まれ変わってしまった。

生まれて十二年。

意識が覚醒して十年。

生まれ変わり赤ん坊になり、赤ん坊から少年といえる歳にまで成長した。

今、何故こんなことが頭の中に浮かぶかというと
—
種の走馬灯だったりするんだろうな、これは。

「ほらツヴァイ。この暑い日に冷たい床に寝転ぶのはいいけど、汗を拭いてからにきなさい。風邪を引いたらどうするの?」

冗談混じりの女声。

ここ十二年、嫌というほど聞いてきた声だ。

その声に対してなんの反応もできず、俺は荒い息を吐き続け、熱を持った身体を冷たい大理石に投げ出していた。

「せっかく私があるあなたの鍛練を見てあげているのだから、少しはお姉ちゃんに良い所を見せなさい。男の子でしょう？」

視線を挙げれば息一つ乱さず悠然と立つ俺の姉。

螺子が一本といわず五・六本抜けていると噂の女王。

アルシエイラ・アルモニスが楽しそうな笑顔で俺が立ち上がるのを待っていた。

日課のように鍛練と称して俺をボコるだけボコったアルシェイラは、涼しい顔をしてティーカップを口元へと運ぶ。

つい先ほどまで一方的に俺をボコっていたとはいえ、疲れた様子も見せず、また汗の臭いさえしない。

まったくもって化けものだった。

まあ、圧倒的強者が誰かを鍛えようとしても、優れた師匠になれるとは限らない。

その証拠にここ数カ月で伸びたのは回避力と耐久力、そして回復力程度のものだ。

鍛練の厳しさに対して、成果が割に合ってねえよ。

そんなことを考えていると、アルシェイラが匠の作意を散りばめたカップをソーサに置く。

彼女の口元には綻び。

「しばらく味合わない間に、ずいぶんと紅茶を入れるのが上手くなつたわね、ツヴァイ。あ姉ちゃんびつくりしちゃった」

微笑みをテーブルをはさんで座る俺へと向ける。

それを見て俺も顔を綻ばせる、なんてことはしない。

むしろ、鍛練の疲れと呆れ混じりのため息が漏れた。

アルシェイラと同じ色の黒髪が、尻尾のように揺れる。

7

「それ、先々週にも聞いた。リントンス風に言うなら、二万とんで百六十分前にも同じことを言ったよ、姉さま」

「それってビミヨーに長いのか分かり辛いわよね」

「確かに」

知り合いの持ちネタであることをいいことに、姉弟で笑いあう。

しばらく笑いあって、アルシェイラは喉が渴いたのか、また紅茶に口をつける。

「姉様」

「どうしたの？」

アルシェイラは紅茶を一口飲んでから返事を返し、また一口含む。

「家出しようと思います」

何気なく、しれっと晩御飯の献立を告げるように言った。

その瞬間、アルシェイラは口に含んでいた紅茶を吹いた。

それはもう、盛大に。

小さな虹ができそうな勢いで。

対面する俺の顔面目掛けて霧状の紅茶が降りかかり、両目に入り込んだ。

「目がっ、めがあああああっ!？」

どごそのなんちゃって王族のような叫び声を上げながら、椅子から転げ落ち、床とカーペットの上を転がりながら往復する。

紅茶に入れられていた糖分とミルクが目の粘膜を刺激して地味に痛え。

涙が紅茶を洗い流すまで床にうずくまり、アルシエイラはアルシエイラで紅茶が変な方に入ったのか、咳込む。

俺は椅子に座り直し、顔についた紅茶と涙をハンカチで拭き終わったころ、ようやくアルシエイラが落ち着いてきた。

咳だけは、だが。

「ちょ、ちょっと。家出しますって、そんな、宣言すること!?!? というかなんでまた!

バーメリンがいやらしい目で見てくるとか、そういうセクハラが原因? まさか天剣たちに苛められた!?!」

「まずは落ち着いてください。ほら、深呼吸」

俺に促され、深呼吸を始める姉。

息を吸って吐いて、数回。

ゆっくりと深呼吸をして一分。

「天剣じゃなかったとしたら何が原因? まさかりヴァネスの爺どもに」

全然落ち着いていなかった。

混乱の真っ只中。

その様子を見て、ため息を吐き、本題に入る。

「別に他意はないよ。前回、前々回と家出をした時には随分と騒ぎになったから、今回は家出する前に言っただけ」

「うう……」

前に家出した時は本当に凄かった。

王宮中が引つ繰り返るような騒ぎだった。

しかしまあ、仕方ないことだろう。

随分と歳の離れた姉弟なのだ。

俺とアルシェイラの父親は俺が生まれる前に病死し、母親は出産後間もなく他界した。

だから俺は両親の顔を見たことはないし、実質アルシェイラが両親のようなものだった。

溺愛されていたし、自慢の弟で息子的存在である自覚がある。

だから手紙一つ残して何処かへと消えた時、寂しさのあまり盛大に騒いだのだ。

それが過去二回の家出の様子の一部。

だからこそ俺は、過去のよような騒ぎを嫌って宣言した。

『家出します』と。

しかしそんなことを唐突に言われて驚かない人間がいるだろうか、いやいないだろう。

というより、家出しますと宣言すること事態、人類史上前代未聞のことではないだろうか。

「今回ももうアポは取ってあるから、持って行く物を準備して、明日出るよ」

「もう……止めても聞かないでしょうから仕方ないけど、そういうことはもう少し早めにお姉ちゃんに言ってほしいな」

「次回があれば必ず」

「で、今回はどこに行くの?」

「サイハーデン刀争術、ね。ついにこの間リンと意気投合して鋼系の使い方を教えてもらって、五か月ほど留守に。」

二年前はミッドノット。四年前には銃衝術と念威についてスワッテイスとキュアンティス。

六年前にはルツケンスの門を叩いて　　あ、始まりはカナリスから教わった殺到だったわね。

ちよっと習いすぎなんじゃない？　どれか一つに絞った方が効率も上がると思うんだけど。現にさっきの鍛練では」

「俺は常に二番手。そう自分自身で理解してるから。だからそこ全てのモノに手を出して、器用貧乏になってみようかと」

遮るように言って、紅茶に口をつける。

確かにアルシェイラの言っていることは正しい。

普通、強くなりたいなら何かを極める方が効率がいい。

が、そんなのは普通の人間の論理。

俺のような例外には当て嵌らないことだ。

そもそも何かを極める、なんていうことが俺には出来ない。

不幸なことにも自分自身で理解してしまっている。

剣も刀も銃も体術も、須らく違和感を感じる。

理由は分かり切っていることだが、解決する方法もないことも分かっている。

自分の力を発揮する術が現状見つからないのなら、次善。

全ての状況に対応できる対応力を身につける。

そのために多くの武芸に手を伸ばす。

自分の才能の上限に達し頭打ちになれば違う武芸に、違う流派へと流れ流れて現在に至る。

その流れに後悔もなければ不満もない。

当然と割り切っている。

自分が淹れた紅茶は随分と味気ないものだと思いつつながら、俺はアルシエイラと家出の条件について話し合った。

王政を布くグレンダンで、代々王を輩出している三つの王家。

通称三王家が一つ、ロンスマイア家の豪邸。

その一角にある鍛練場で、俺は歳の離れた従妹のクラリーベル・ロ

ンスマイアと駄弁っていた。

鍛練の合間の休憩で、ここ一週間にあったことを互いに話すのは恒例になっていた。

「また、家出ですか。アルシェイラ様が黙っていないんじゃないですか？」

「そこは大丈夫。三度目だから色々と学んでるさ。ちゃんと許可を取ってきたから前のような大騒ぎにはならないよ」

「家出って、保護者の許可が必要なものでしたっけ？」

なんとも変な話だと、クラリーベルは笑う。

確かに。

家出って本来は黙ってするものだよね。

けど、そうすると前回や前々回のように大騒ぎになるからいた仕方がない。

それだけ愛されているってことなのだろう。

「それで、今回の家出先はどちらに？」

未だ十に歳が届かず、甘いく緩やかな輪郭のクラリーベルが、一頻り笑った後俺に聞いてきた。

「サイハーデン刀争術。活きのいいのが一人いてね。たぶん天剣に一番近い」

そう言うと、クラリーベルから笑顔が消えた。

『天剣』

槍殻都市グレンダンの秘宝中の秘宝。

世界で十二本しかない特別な錬金鋼。

グレンダンに住む人々が羨む最上の武器にて称号。

たった二文字の言葉は、クラリーベルにとって他とは違う特別な意味を持つ。

「わたしより、強いんですか？」

「ああ、そうだな。お前より確実に強い」

一目、鍛練をしているところを見ただけだが、その才能と実力はあの程度理解できる。

俺よりクラリーベルに近い歳のくせによくもまあ、あそこまで。

そう思わせるほどの技量は持っていた。

はたして俺があれくらいの時にあそこまで強かったのだろうか？

「そうですか」

「そうだな。けど選定式は未だ起こらず天剣も一つ空位のままだ」

「なら、まだ可能性はありますね」

「そうだな」

そう言うしかなかった。

可能性は零に近いというのに希望を与える。

残酷な現実には、甘い幻想を抱かせることしか出来ない。

「では鍛練あるのみです」

言って、勢いよく立ちあがるクラリーベル。

俺の真似をして、後ろで結った黒髪が子犬のように跳ねる。

「レストレーション」

クラリーベルは待機状態にしてあった錬金鋼を復元し、片刃剣へと変える。

それに続くように俺も立ち上がり、剣帯に納めていた複数ある錬金鋼の中から一つを取り出す。

しかしこの錬金鋼というものは、如何して中々オーバーテクノロジーの塊なのだろう。

二十センチ程度の長さの棒が、一メートルほどの刀に変化することもあれば、数メートルの大剣へと変化することもある。

都市の中に引きこもって外を見なければ感じないが、俺たちの好きな形や重さなどの情報を機械を通して打ち込めばその通りのモノになるなど、本当に異世界にいるんだな、と実感させられる。

勉強してはいるが原理をいまいち理解できない俺としては、未だに気味の悪いモノの一つだ。

それとあと一つ。

「レストレーション」

この起動音鍵と共に、剽と呼ばれるナニかを流し込み待機状態の錬

金鋼が起動。

記録されている情報を元に、復元。

手には新調した太刀。

サイハーデンが太刀を使う流派だったので、新しく手に入れた武器
それに剋を流し込んでいく。

剋。

これもまた異世界に来たなあ、と感じさせる。

異世界というよりは、ファンタジーか。

剋脈と呼ばれる臓器が製造する神秘的エネルギー。

肉体を活性化させ強化することもできれば、破壊を振りまくエネルギーでもある。

ある種の万能エネルギー。

詳しくは万能ではないらしいが、俺からすれば万能と言ってしまっ
て構わない。

そこらへんの話は、眼鏡をかけた学者あたりが講釈を垂れてれば
いいだけの話。

その源である剋脈を持っている者のことを武芸者と呼ぶ。

俺もクラリーベルも武芸者で、姉さまも武芸者。

剋脈を持たない一般人もいるから、俺は武芸者に生まれてよかった
と思っっている。

じゃなければ結構な遠まわりをして力を手に入れなければいけな
かったから。

手っ取り早い力を持って生れて、心底よかった。

など如何でもいいことを考えながら、クラリーベルが何時襲いか
かってきてもいいように、警戒だけは怠らない。

いくら女の子で十にも届かない年齢でも、刃引きをしていない武器
を持っているんだ。

それ相応の命のやり取りが、この鍛練には存在する。

彼女から発せられる殺気に近い闘気と剋を受け流す。

俺の心に闘いの高揚感を与えてくれる程度に心地い。

対するクラリーベルは尋常じゃないほど汗を流し、肩で息をしてい
た。

抑えているとはいえ、俺は剋を垂れ流しにしている。

それが彼女の心身をすり減らしているのか、それとも殺気の方が。

「 往きます！」

睨み合いのまま消耗してしまうのなら、仕掛ける方がいい。

そう判断したのかクラリーベルが打って出る。

二十はあつた距離が一刀足で詰められる。

その速度は激烈。

例えるならば稲妻か。

一般人では『目にも止まらぬ速さ』だろう。

目と一緒に首と身体を動かせば見える的な。

それでもまあ、小さな身体から出るはずのない速度。

それを可能にする剄。

剄を体中に巡らせ、身体能力を爆発的に増加させた。

けど

クラリーベルの身長に合わせて作られた短剣大の片刃剣を、刀の腹で流し、首を狙って放たれた斬撃を逸らす。

一撃離脱。

一瞬の交差のあと、瞬時に俺の背中へと通り抜ける。

身体の小さなクラリーベルが力で対抗するのは阿呆のすることだ。

だから小柄な体格を活かし、スピード勝負のヒットアンドアウェイをしる。

そう教えた通りに実践してくるあたり、嬉しく思う。

振り向きざまの、遠心力と腰の捻りを加えた必殺の意思が込められた斬撃。

軽くしゃがみ、頭スレスレに通り過ぎる刃。

何本か髪が持つていかれた。

目の前には腕を振るい身体の開いたクラリーベル。

俺が背の小さなクラリーベルの懐に潜り込んだ形。

刀の間合いじゃあ、ない。

柄を握ったままなのを気にせず、アッパー気味に拳を鳩尾に叩きこむ。

見た目同様に軽いクラリーベルの足が地面を離れ、身体が宙に浮く。

「かはっ」

クラリーベルの小さな口から息と唾が漏れる。

一瞬の停滞。

肺から空気がなくなり硬直する身体。

その身体に向かって、右足を軸にして左回し蹴りが脇腹を捉える。

確かな感触。

全力での一撃だ。

咄嗟に剄を集中させ防御したみたいだが、それさえ突き抜けクラリーベルの肋骨を押し折る感触。

そしてそのまま吹っ飛んでいき、鍛練場に隣接している屋敷の壁にぶつかり漸く止まる。

残心と共に息を吐く。

いや、子供の成長も侮れんね。

半年間、クラリーベルの鍛練を見てそう思う。

始めは俺のプレッシャーで一步も動けずに、そのまま倒れていたのにもう二撃目まで出せるようになった。

俺は直接的な戦闘力が伸び悩み気味だからそう感じられないけど、

クラリーベルの成長を見ると成長早いなあ、と感じる。

親戚の子供や他所の子供の成長が速く感じるのは、異世界でも同じ
ってことか。

砕けた壁の瓦礫が破片となってクラリーベルの身体へと降りかかる。

くぐもった唸り声と共に、吐血。

「死んでないか、クララ？」

恒例の言葉を向ける。

何時もこうだ。

クラリーベルと鍛練する時、最後の締め模擬戦では遠慮無用。

死なない程度に相手をする、といっても急所に攻撃しないと
いうだけで、腕が飛べば骨も折れる。

体捌きや斬撃は全力で。

それがクラリーベルと俺の約束事の一つ。

「はい、お兄様。生きては、います」

折れた肋骨が肺にでも刺さっているのか、血反吐を吐きながら弱弱しく返事をするクラリーベル。

何度も死に目を見ているというのに懲りないところをみると、真正のMなのかと少し不安になる。

「それは上々。予想以上に良い手応えだったから、勢い余って殺してしまっただかと思っただよ。立てるかい？」

「……いえ」

まあ、肺に穴が空いていれば当たり前か。

クラリーベルに近寄り、身体に降りかかった煉瓦の破片を取っ払って、手を差し伸べる。

差し出した手を弱弱しく握りしめられるのを確認してから、引き上げて立たせる。

が、右腹の肋骨何本か折れて内臓が傷ついた状態じゃあ、立つこともままならないらしい。

ふらつき俺の胸に頭を預けたクラリーベルは、そのまま身体を預けてきた。

咳込み吐いた血が、俺の服を汚していく。

剷を身体に回して内臓の傷を癒しているが、刺さった肋骨を如何に

かしなければ根本的な解決にはならない。

早く医師に見せる必要があるな、これは。

速攻で手術、入院、絶対安静のコンボ確定だ。

「……すみません」

荒い息で言う。

自分の血で俺の服が汚れてしまったことに対する謝罪か。

「いや、構わないよ。それより抱き上げるぞ」

一応年頃の 父親や祖父と一緒に風呂に入ること嫌がるようになったクラリーベルに気遣い、断りを入れる。

入れるだけでクラリーベルの返事を待たずに腕と脚の関節に回し、もうひとつの腕で肩を抱く。

俗にいうお姫様抱っこで重傷の彼女を抱き上げた。

俺の腕の中で咳と共に血を吐き、恥ずかしそうに身を捻るクラリーベル。

特に文句も出ないから、そのまま歩いて屋敷の正面まで歩き、玄関

にそびえ立つ門のような扉を蹴破りはいると、屋敷の中ですでに待機していた医師が駆け寄ってきた。

毎度毎度俺がクラリーベルを半殺しにするから、屋敷の部屋の一つを手術室に改築して常備しているからなあ。

先月は左腕と右脚をくつつけ、戦先月は大やけどの治療。

俺の芸術的な力加減とクラリーベルの生命力、そして目の前で顔を青くして彼女の状態を確認している医師の医療技術の三つ。

その三つのおかげでクラリーベルは今の今まで生き永らえてきた。

吐血と陥没した右脇腹。

それを見た瞬間にどのような容体かを理解した医師は、急いで看護婦に指示を飛ばしていく。

ストレッチャーにクラリーベルを横たわらせ、俺は邪魔になるのが分かり切っているから、そのまま見送る。

医師の怨みがましい視線を受け流し、そのままロンスマイア家のリビングへと足を向ける。

当然と言えば当然。

治しても治しても、壊される少女の治療をしなければいけないんだ。

医師的に見ればたたまったものではないのかもしれない。

その怪我の原因の全てが俺なのだから、睨まれても仕方ない。

だから、本当は不敬罪に当たる罪状の医師に苦笑いは浮かべても、罪には問わずに放置している。

「クツクツクツ。随分と恨まれておるのう、ツヴァイ」

屋敷を出ようと歩いている俺を止める声。

振り返ればそこには一人の老人。

ティギリス。ノイエラン・ロンスマイア。

天剣授受者の一人にて、ここロンスマイア家の家長。

その歳を表すように長く白い顎鬚を撫でながら、ティグ爺は溜息を吐く。

「今回も随分と派手にしたようじゃな」

「クララが望んだことだよ。文句は言わなくてももらいたいんだけど、ティグ爺」

「言うものかよ。あやつがそれを望み強くなるならばな。……ワシ
が教えんでいいのは楽じゃしの」

「手を抜くなよ。自分の孫でしょう」

時々爺馬鹿になるくせに、ティグリス自身はクラリーベルに対してなんの修練方法も教えていない。

そのことに不満を覚える。

あのズボラなアルシエイラでさえ、俺に鍛練をつけてくれるというのに、この爺は。

扱っ錬金鋼の形状が違うから体捌きや戦闘方法などは教えられないだろうが、せめて剉の精密コントロールくらい教えておけよ、と。

「しかしあやつは師事をワシではなくお主に頼んだ。ならばワシがあれこれ口を挟むのはお門違いじゃろって」

「なら文句を言わないでください」

「孫のことで文句はない。じゃが屋敷の壁が陥没したぞ。毎度毎度修復しても新しい人型の窪みをこさえよって。修復費に幾らかかっ
ておると思っておるんじゃ」

「王族で、しかも天剣授受者がセコイこと言わないでくださいよ」

「金はあっても困らんし、最近はこの家も落ち目でのう」

飄々と言っのけるティグ爺。

人生経験の差がモロに出ているから、良い合いには勝てない。

けど特に何か失態を犯したことがないロンスマイア家の家計が苦しいとしたら、それはティグ爺が若いころに調子に乗って腰を振った結果でしかなく、俺の屋敷破壊で消費される金額なんて、腰の一振り分程度の価値でしかないだろうよ。

「また王宮を出るらしいの」

「まあ、ね」

既に知っていたか。

つい数時間前にアルシェイラに話したばかりの最新情報を知っていることに驚きはない。

内部情報伝達の早さにおいても、この世界でグレンダンが一番という自負があるから。

「今度は何処の流派に行くんじゃ？」

「サイハーデン刀争術ってところ」

サイハーデンの名前を聞いた瞬間、ティグ爺の飄々とした表情が一瞬強張る。

その意味を聞こうと口を開くが、手術室の扉が開く音。

それから足音。

医師が手術を終えたのか。

それとも肋骨や肺の傷などの状態が判明して、報告に来たのか。

どちらにしてもお小言を頂くのはティグ爺だけで十分だ。

撤退するでしょう。

ティグ爺に別れを告げて、とつと俺は屋敷の玄関を潜る。

しかしまあ、クラリーベルも何であんなになることを望むかねえ。

幾らなんでもその対価にそこまでの価値があるとは思えないが……。

約束。

今よりも小さかった頃の約束。

恐らくは叶うことがないと俺は理解しながら交わしたソレ。

真撃に、クラリーベルは叶うように努力をしている。

そのことに心が痛む。

アルシエイラが俺を息子のように可愛がるように、俺はクラリーベルを妹のように思っている。

赤ん坊のころから面倒を見て、一緒に遊び、今では稽古をつけてやっている。

だからクラリーベルの技量とこれからどういう風に伸びていくのか、どれくらいの時間でどれほどの力を手に入れるのか、大体予想がつく。

あの少女の努力は決して実らず、約束は期限切れで終わる。

だからこそ愛おしく思っただが。

ロンスマイアの敷地を出て歩いて王宮へと向かった。

遡ること、ほんの数日前。

何時もの日課のようにアルシェイラと鍛練を耐え抜いた俺は、のんびりと散歩をしていた。

まったくもって化け物だと思う。

このグレンダンを破壊してしまうために全力での鍛練など行えないが、それでも俺はアルシェイラに勝てる気がしない。

そう愚痴りながら、何時もは通らない小道へと足をのばす。

この世界に生まれ落ちてから俺は前世とは違いまるで真逆の生き方つまりは生真面目に生きている。

真面目に生きていくためには、この世界では力が必要だった。

力がない者はこの世界で生きていけない。

それは前に生きていた平和な世界の比ではなく、死に易いということ。

当たり前だ。

この荒廃しきつた世界では、人間は生身で都市の外を歩くことが出来ない。

汚染物質と呼ばれるものが世界を覆い、人間は世界から追われる身となった。

しかし誰かが創りあげた移動要塞都市、レギオスに人々は住み生きていた。

幾千幾万と星の数ほどあるレギオスに人々は頼って生きているのだが、問題は色々である。

その最もたるが汚染獣。

この汚染物質の充満した世界で唯一まともに生きていくことが出来る生物。

それどころか一利どころか百害しかない汚染物質を食らって生きているほどのキチガイ生物。

そいつらは汚染物質のみで満足しておけばいいものを、それだけでは満足できず人間を捕食する。

そして強烈な環境に適合できる汚染獣に一般人が敵うわけがない。

まだエイリアンやプレデターといった異星人系の奴らとよろしくやっつてるほうが気楽だろう。

恐怖の対象なのだ汚染獣というものは。

人などと比べることさえ馬鹿らしい巨大な汚染獣に、一体どうやって対抗しろと？

ミサイル？

そんなものを湯水のように消費する余裕、この世界にはない。

最早過去の産物なのだ。

それでは銃で？

確かにこの世界に銃はまだ存在する。

しかし数に限りがあるし、ウルトラマンやバルタン星人並にデカイ化け物相手にそんなものが効くはずがない。

一般人には対抗手段がないのだ。

彼等はただ汚染獣に見つからない事を願っていることしか出来ない。

しかし見つかってしまえば、無慈悲に不条理に汚染獣に蹂躪され、食い尽くされる。

あつと言う間に人類が滅亡してしまいそうなものだが、世界はそこまで無慈悲に出来てはいないらしい。

世界に汚染物質が撒き散らされたあと、人間側にも変化は起きた。

劉と呼ばれるエネルギーを発する人間が出てきたのだ。

劉脈と呼ばれる臓器を体に宿し、人間とは別のナニかへと、汚染物質が人を変えた。

そう言い伝えられている。

劉は使い方によっては人を超人的なまでに強くする。

それこそ汚染獣を殺すまでに、だ。

全ての人間に剄を使えるわけではない。

数少ない　　のかは分からないが、剄を使える者、それを皆レギオスを守護する者として敬意を込めて　　武芸者と、そう呼ぶ。

そして俺やアルシェイラ、クラリーベルは呼ぶ方ではなく、呼ばれる方。

だから単純に言ってしまうえば、力を求める資質がある。

そんなわけで俺はこの世界で真面目に生きるために勉強に励んだり鍛練を積んだりしている。

わけなんだが、俺も今年で十二歳になり、真面目に鍛練を積んだのと自意識が完全に完成して取捨選択することができるから、相当強い部類に入っているはずだ。

そんな俺には人生計画がある。

当面の目標としては、グレンダンで力をつけること。

この都市は武芸者にとって力をつける、という意味において一番適している場所だから。

天剣授受者になることは考えていない。

天剣は十二本しかない。

十二個しかないから、天剣授受者は上限十二人の狭き門なわけだが、

その絶対的な力で崇拝の対象とっていいほどに絶対的な存在として君臨している。

そんな崇拝される対象になるつもりはない。

そんなことを考えていると、不意に一つの道場が目にとまった。

寂れた道場だが、グレンダンでは珍しかった。

零細道場など出来ては潰れ出来ては潰れと日常茶飯事だ。

なのに寂れてはいても潰れてはいないことに疑問を感じた。

が、その道場の中に籠っている劉で得心がいった。

半端な量じゃあねえよな。

興味本位で入り口に近づいたら、受付で退屈そうにしている女性が俺に気付き声をかけてきた。

ちようど女性も暇をしていたらしく、軽く『今日も暑いですね』という天候の話題から入っていき、日ごろの世間話をして、漸く互いの名前を名乗った。

俺は王族でもあって一悶着あったが、そこら辺は慣れている。

それに俺が王宮を出てそこら辺をフラフラしていることは、城下でも噂になっているらしい。

「さつきからチラチラ見えるんですけど、稽古付けられてるの子供ばかりじゃないですか。子供教室の時間なんですか、ルシヤさん？」

「いやいや、そんな選り好みなんてしてないよ。ここは一応身内だけやってるようなものだから、子供ばかりになっちゃおうのさ」

「身内だけって、ご近所さんとか町内会とかそんな感じのやつですか？」

いくら大家族でも、それだけでこの道場にいる人数は多すぎる。

気配的には大人が一人と子供が12〜3ぐらい、と大雑把に判断。

最低でもここの受付をしているルシヤを含めて十四人になる。

そんな大家族がここグレンダンで食べていけるのは王族や一部上流階級程度のものだ。

「そんなんじゃないよ。ただウチは家が孤児院だからね。その園長さんがたまたま武芸に精通しているからって、将来武芸者になりたい子たちに教えてるだけ」

「にしては随分と将来有望な子が一人いますね」

「あ、分かるんだ。ツヴァイ君も武芸者？」

「ええ。ちなみにここの流派って何なんですか？」

「サイハーデン刀争術って古い流派だよ。今はもう落ちぶれて門下生は子供たちしかないようなものだけだ」

「サイハーデン……ああ、あのサリンバン教導傭兵団の」

「うわ、随分物知りだね。グレンダンでも知らない人の方が圧倒的に多いのに」

驚いたような、呆れたような声色でルシヤが応えた。

それほどまでにサリンバン教導傭兵団はグレンダンに置いて認知されていない。

俺は王族であつたが故に知っていた程度。

腕利きの武芸者を集めて、とある任務を遂行するためにこの世界を彷徨う集団。

その長に任命されたのがサイハーデン刀争術の師範代だった。

廃れていることが不思議な流派。

だから興味を持った。

「ルシヤさん。サイハーデンの道場って内弟子で入門させてくれたりするの?」

「はい?」

こうして俺ははサイハーデン刀争術にお世話になることになった。

01 (後書き)

辰年 自分の年にもなったし、心機一転で書きかけのレギオスSSを描き続けることしました。

待っていた人はいないと思いますが、よろしくお願いします。

鳴りやまぬ拍手。

入場のアナウンスが流れてから数分間。

観客の全員が立ち上がり俺に向けて拍手や歓声が響いていた。

グレンダンで一番大きな闘技場。

俺の武芸者同士の戦いを観戦しに、お忍びで訪れたことがあった場所。

しかし今回は観客としてではなく、一武芸者としてこの場にいた。

家出して、サイハーデンの道場に内弟子として入門する条件として挙げられたこと。

それはアルシエイラがしていた公式試合に出場して、勝つこと。

それが出来ないのならば、即刻帰宅。

二年間、その約束を破ることなく公式試合に出て、そして勝ち続けてきた。

そんな俺に固定ファンが付くのも、分からない話じゃあない、か。

ようやく鳴りやんだ拍手喝采に溜息を吐き、前を見る。

今回の対戦相手は髭面の男。

身体の至る所に醜い傷跡が黒色と共に残っている。

それは多くの戦場を駆けてきた確かな証拠だ。

そしてそれが俺にとって取るに足らない相手である証だった。

多くの洗浄を戦ってきた証拠である傷跡。

それが黒く色づくということは汚染獣戦で負傷し、傷や肌を汚染物質で焼いたということ。

優れた武芸者とは紫外線において、傷一つ負わない。

いや、負ってはならない。

汚染物質が肌に触れることを妨げる防護服が破ければ、汚染物質が直接肌を焼き、いかに超人的な力を持つ武芸者でも死に至る。

だから都市外で傷を負う武芸者というのは半人前、または弱者であるという認識が、ここグレンダンにはある。

それに男が纏う剄を見て、取るに足らない相手であることを教えてくれる。

アルシエイラとの約束がある。

だから我慢して戦うが、それでも低レベルの相手。

やる気が出ないのも仕方ないわな。

対して相手はやる気満々。

王族と対戦できることを光栄に思うとかなんとか。

大剣を構え、試合開始の合図を待っていた。

俺は長く伸ばした髪を結びあげる。

「レストレーション」

起動鍵語をつぶやき、待機状態で両手に収まる錬金鋼に剉を流し込み形質変化。

両の手に重さ。

錬金鋼は確りと設定された形状、質量に復元される。

形状は小銃。

錬金鋼が復元されて現れたのは、二挺の銃。

持つ手はダラリと下げ、標準を定めもしない。

相手の眉が跳ね上がる。

侮辱されたと思ったのだろう。

やる気がない以上、致し方がない。

そして試合開始の合図が鳴り響く。

観客たちの歓声が爆発的に高まる。

「はぁ………」

溜息を一つ吐きだす。

それを隙と見たのか、髭面の男は距離を詰め、大剣を振りかぶる。

その様を見て、やはり憂鬱が口から溜息として漏れた。

『Re:write』

第一章：ビギニング・セカンドライフ（02）

槍殻都市グレンダンの片隅。

町外れの複雑に入り組んだ道が、まるで迷路のような場所。

一歩間違えれば治安が最悪のスラムへと入り込んでしまいかねない場所の一角に、俺は孤児院の少年と一緒にいた。

周りと比べれば少々大きな家の裏手で、俺たちは風呂焚きを使う薪を割っていた。

「おいレイフォン、最後行くぞ」

「うん」

短く返事をしたレイフォンに、俺は手首大の太さの薪を中に放り投げる。

間合いに薪が入る寸前、レイフォンが動いた。

「シッ！」

掛け声とともに閃光が奔る。

瞬間。

薪が縦に四分割された。

そしてそのままレイフォンの足元に軽い音を立てて転がり落ちる。

まったくもって歳の割に可愛げのない刀技の技量。

同じ流派であるサイハーデン刀争術を習い始めたというのに、刀技ではレイフォンに一歩先を行かれている。

俺の方が五歳も年上なのに何とも情けないことだが、色々な流派や武術を納めている関係上、身体がそちらの方に慣れ親しんでいるために、サイハーデンの習得が遅れていると自己弁論。

そんなことを考えながら、散乱している薪を拾い集め一か所に固めてから縛り上げる。

これで今日の仕事は終わりだ。

あとは晩御飯を食べて夜の自主練をしてから風呂に入って寝るだけ。

「兄さん、リーリンたちが料理を作っ待ってるから早く行こう」

「ああ、それじゃあ運ぶか」

「うん」

レイフォンに促され、切り刻んだ薪を抱える。

向かう先は家の中。

俺がサイハーデンの内弟子になってから二年の月日が流れた。

俺は今もまだ、孤児院に厄介になっていたりする。

巨大なテーブルに並べられた大量の料理が、無邪気な子供たちの手で蹂躪されていく。

俺の師匠たるデルク・サイハーデンはただ黙々と食べている。

が、周りの子供たちの騒がしさが、それを気にさせないだけの騒音となつて俺の鼓膜を刺激する。

さながら戦場のような食卓。

王宮暮らしの時には考えられないような食卓に、内弟子になった初日は啞然としたものだ。

俺は最低限の栄養とカロリーを確保し、そこで食事をやめる。

この年頃の子どもたちは、いくら食べても食べたりないような奴らばかりだし、それだけの量を確保するのは、この貧窮した孤児院の経済状態では難しい。

しかし今日の食卓は孤児院の経済状態からしたら、珍しく奮発した量と質だった。

その理由はこの孤児院の最年長者であるルシャが、めでたくも知り合いの男性と結婚することになった記念。

結婚式はまだ先だが、既に婚姻届は役所に届け出され、明朝には相手方の家へと嫁いでいく。

だからこんばんはお別れと結婚祝いを兼ねて、少し豪華で量の多い

料理がテーブルに並んでいた。

そんな料理も万年腹ペコな子供たちの前では儚い幻のように消えていく。

そんな様子をレイフォンは苦笑いで、しかし確りと自分の量を確保しながら見ていた。

続いてレイフォンの隣に座っているリーリンに目を向ける。

先ほどレイフォンと薪割りをしていた時に名前が出ていた少女だ。

レイフォンと同じ年で幼馴染の女の子。

癖っ毛のオレンジ色の紙を肩口ほどまで伸ばし、スカートではなくズボンを書くことを好む、というかズボンを穿いているところしか見たことがないくらい、活発な子。

のはずなのだが、やけに元気がない。

食事中も、何時もなら最低限のテーブルマナーについてお小言を言うはずだが、どこか上の空で黙々と食事をしている。

何が原因なのだろうと考え、思いつくことは一つ。

心当たりはあったが、時間が解決してくれる問題でもあった。

クラーベルと同じような年齢の女の子の扱いが分からないのもあるから、放置しようと思う。

まあ、何かあればレイフォンに任せておけばいいか。

そう思い、立ちあがって食器を台所の流しに置く。

腹ごなしの鍛練でも始めよう。

荒い息を整える。

顎から滴り落ちる汗を、用意していたタオルで拭き取り水分補給。

熱帯夜の中、放置していた水は温くなっていただけ、それでも水分は喉を潤す。

汗で肌がべたつくから、残った水を顔にかけ、またタオルで顔を拭く。

予想より遅くなったがこれから遅い風呂と洒落こむか。

たらふくとは言えないが飯を食べ、適度に身体を動かし、風呂で汗を流す。

この孤児院での生活は王宮のそれとはかけ離れているが、これはこれでありだと思つ。

夜の風が熱い身体に気持ちい。

偶には風呂上がりには夜風に当たりに出るのも良いかもしれない。

玄関に向かって歩いてみると、ぽつりと誰かが軒先に座っているのが見えた。

リーリンだ。

小さな身体を縮こめるように三角座りし、俯いていた。

私落ち込んでいますと全身どこるか雰囲気でも表現している状態に、俺は一步引いた。

ここまで落ち込むことだろうか。

「
兄さん？」

気配でも気付かれたのか、俯いていたリーリンが突然顔を上げて俺を見た。

目には涙はなく、ただ頬に涙が通った跡が残っていた。

鼻水が、少し鼻から垂れていた。

「やあ、リーリン。如何してこんなところで泣いているんだ？」

なるべく自然になるように努めて声をかけた。

俺の声を聞いて、リーリンは我慢していたのか、それとも枯れ果てていたのか、止まっていた涙が目じりに溜まる。

訳も言わずに嗚咽を漏らすリーリンを、少し迷ってからそっと抱き締める。

「……家族だった人が急にいなくなるのは、寂しいかい？」

腕の中にいるリーリンの身体がピクリと震えたのが伝わる。

ビンゴ。

貧窮した孤児院というものは悲惨だ。

歳が出す補助金が少しでも減少すれば、それだけで子供たちが一人死ねる。

二年前にあった食糧危機では、半数以上の子供たちが餓死し年を越せなかった。

だからこそ、リーリンは孤児院の人間がいなくなることに対して過剰な反応を見せている。

心の傷、と言っても良いのかも知れない。

今の姿のリーリンの姿を見て、少し心が痛む。

内政に関わっていないとはいえ、王族としての責務を全うしているとは言えないから、この都市を見て、この少女を見て、何も思わないわけがない。

だがしてやれることは少ない。

俺の力を使えば、この孤児院の援助金を多く出させることはできる。

しかしそんなことをしてしまえば、他の孤児院から不満が出る。

他の孤児院にも平等に分配できるほどの金を、俺は動かすことができない以上、何もできない。

何かを言うこともできず、ただただリーリンを胸に抱いて途方に暮れる。

「お兄さんは寂しくないの？ ルシャ姉さんがいなくなることで…
…わたしは寂しいよ。家族がいなくなっちゃうことが怖い。
ルシャ姉さんは幸せになるために、結婚するためにここを出て行くから、二年前と違うのに…わたし、出て行ってほしくないと思っ
ちゃう」

「俺も少し寂しいかな。でもそれより安心したよ」

「安心？」

「ルシャさんが行き遅れずにすんで、心底よかったと思っている」

「それは、お兄さん言い過ぎ」

真面目な話を茶化したら、リーリンの笑いのツボに入ったらしく、大笑いはしないものの笑いを噛み殺して、膝を抱える手に力を入れながら肩を振るわせる。

笑っていて、少ししてから違うことに気づく。

リーリンは肩を震わせながら、また泣いていた。

「わたし、わたし、本当に、いやな子だなんて、おもう。ほんと、なら、ルシャ姉さんの、こと、祝ってあげなきゃ、なのに」

「リーリン」

俺はただ名前を呼んで、抱きしめる手に力を入れる。

リーリンは俺の顔を視て、俺はリーリンの潤んだ瞳を見つめる。

「悲しい気持ちは理解できるよ。孤児院だからね、普通よりも沢山の別れを経験してるし、辛い思いもしてきた。

俺がここに来て二年しかたつてないけど、そういうのは見てきた心

算。

だからリーリンの気持ちは理解できるし、ルシャさんにここを出て行ってほしくないと思う気持ちも分かる。

自己嫌悪するのよね。俺だって何時も後悔してばかりだ。時々生きているのが嫌になる時だってある」

誰かを励ます、といった経験がない俺は、自分が何を言っているのか段々分からなくなってきた。

とにかく綺麗に纏めてリーリンを元気にさせなければ、と焦る。

「あ 何が言いたいかっていうと、リーリンが泣いているのを見ると俺まで泣きたくなってくるし、可愛い子には笑顔でいてほしい、ってこと」

言ってから、全然綺麗に纏められていないことに気づいて、心の中で溜息。

誰かを慰める、ということに対してとことん不慣れ。

「かわいい…ですか？」

わたしが？ と聞き返してきた。

ああ、そこに反応するのか。

小首を傾げながらそんな仕草をすれば、誰だって可愛いと思うだろう。

「可愛いよ、リーリンは。孤児院で一番　　グレンダンで十指に入るんじゃないかな」

「そんな、大袈裟だよ。わたしスカート穿いたりとか女の子らしい格好したこともないし、いつもお小言言ってるし」

「それだけで可愛くないって理由にはならないだろ。それにリーリンは優しい子だよ」

「え？」

「自分で自分の悪いところを見つけて、苦しんで、如何にかしたいと思っっている。

お小言だっこの子供たちの為を思っ言っているんだし、ルシヤさんを笑顔で見送れるようにしようとしているだろ？
だからきつと、リーリンは嫌な子じゃあない」

「お兄さん……」

やっと泣きやんだと思っていたリーリンが、顔をくしゃくしゃに歪め、ポロポロと涙を流して俺の胸元に顔を沈めた。

俺はリーリンの頭を優しく撫でながら、リーリンに聞こえないよう

に溜息を吐いた。

翌日、あれだけ泣いたリーリンは心の整理ができたのか、昨夜のことになかったように何時も通りの笑顔。

孤児院のみんなでルシャさんとその旦那さんを見送った。

長年一緒にいた姉が去っていく後ろ姿を見て、急に実感が湧いたのか泣きだす子供たちもいたが、リーリンとレイフォンがなく冷めているのを俺はのんびりと見ていた。

もう、昨日のことは引きずっていない、な。

子供たちが愚図るのを慰めているリーリンを視て、そう確信する。

元の鞘に収まって、めでたしめでたし。

今日は俺もレイフォンも鍛練は休み。

レイフォンはグレンダンで頻繁に行われる武芸大会に出る予定。

意外と大きな大会なので、そこそこ強い奴が出るだろうが、レイフオンなら楽勝だろう。

次の次くらい勝ち続ければ、レイフオンの目的　　天剣に手が届くかもしれない。

正確には、天剣授受者選定式の出場条件を満たすことができる。

俺には別口の大会がある。

定期的に出場している大会ではなく、アルシェイラが急遽ねじ込んできた大会。

嫌な予感しかしない大会だが、出ないという選択肢は存在しない。

この孤児院が気に入っているし、まだサイハーデンを学びきっていない以上、アルシェイラの気まぐれにも付き合っていかなければならない。

もし仮に孤児院を出るのであれば、何か切っ掛けが、大きな切っ掛けがない限り踏ん切りがつかない。

例えば免許皆伝。

あと少しで手が届きそうだというのに、アルシェイラの我侭ごときでそれを諦めることはできない。

だからこそ、気乗りのしない大会で格下の相手をしに行く。

そんな面倒臭くも楽しい日々を俺は送っていた。

俺は自分で自分の集中力が上がっていくのが分かった。

湧き上がる歓声を無視し、目の前の対戦相手に釘付けだった。

強い、な。

身に纏う雰囲気が違う。

立ち振る舞いが違う。

剽脈を流れる剽の質が違う。

何もかもが、今まで大会で相手にしてきた奴等とは違う。

このグレンダンにおいて、上の中程度の相手。

上の上をこの都市の超越者、天剣授受者として設定しての実力査定でこの結果。

こんな賞金の少ない、小じんまりとした大会に出てくるような相手では、決してない。

思わぬ形で出会った強者に、興奮した。

試してみたいことはいくつもある。

それを試すことができる相手は中々いない。

だから全力に近い力を出せる相手がいることに、歓喜に震えた。

試合開始の合図が響く。

俺を錬金鋼を太刀に復元させ、駆ける。

手始めに挨拶を確りとしなひとなっ！

一刀足で間合いを詰め、振り下ろし。

脳天をかち割るつもり of 斬撃は、相手の片刃剣に防がれ、流される。

ならっ！

腰の捻りを利用した横薙ぎの一閃。

互いの武器が擦れ合い火花が散り、力と体捌きで押し切ろうとするが、拮抗。

俺と女の視線が絡む。

「悪いけど、こちらら生活がかかってるんだ。女でも手加減はできんよ」

「手加減などする余裕はないと知れ」

言われて、拮抗していた消失。

踏鞴を踏むなんて無様な真似はしなかったが、腹を切られた。

腹に熱。

相当深いか、これは！

振り向きざまに身体をねじり、刀と剣が交錯。

今度は鐔迫り合いにならずに、乱撃戦へと纏れ込む。

飛び散る火花。

斬られた腹が熱を持ちだした。

動けば動くほど、血が流れ出る。

余裕は、ない。

久々の強者。

何時も三下とばかり戦っていたから驕っていた。

そんな言い訳にもならない理由で、状況的に不利に立たされていた。

女の表情にはしてやったりといった種の笑み。

俺の顔には脂汗。

左手を脇腹に当てて止血をする。

剣撃を続けながら、内力系活剱を高める。

身体の内部にある剱脈に剱を奔らせることによって、身体能力の強化の他に疲労回復、怪我の修復などが出来る。

それで傷口を塞ごうとするが、そんな時間を相手が与えるはずもない。

放たれた刺突を身を捻って避けるが、起動変化。

突きが横薙ぎの斬撃へと変化し、俺の右脇腹へと伸びる。

「ちいっ！」

際どいところで右手で持った刀ではじき返し、距離を取ろうとする。

それに追いつがる女。

剣撃を交わし、いなしながら耐え凌ぐ。

受けて受けて避けて避けて。

凌いでいくにつれて、余裕が出てきた。

傷口に回していた剱を他へと回す余裕。

傷口を簡単に塞ぎ、既に出血はない。

徐々に徐々にギアを上げていく。

流れる剄の速さも、時間と共に上がっていく。

戦闘中だというのに、相手の姿を気にかける余裕さえ出来てきた。

不思議な女。

きれいな黄金色の髪をポニーテールにして、身なりは小奇麗というか、豪華ではないにしてもきちんとしている。

こんな小規模な試合に出場するような身分の人間ではない。

俺は剣帯に入れている錬金鋼の一つを取り出す。

傷口を押さえていたから、ぬるぬると血糊が付いた掌に力を込めて取り落とすのを阻止。

「レストレーション」

太刀にしては短く、小太刀にしては長い中途半端な長さの刀へと復元。

振るう。

女は辛うじて避け、後退。

試合開始から続いていた乱撃戦がようやく途切れる。

数秒。

一度塞ぎ、激しい動きで開きかけた傷口を完全に塞ぎきるには十分な時間。

「治ったか？」

「待っていてくれるとは、随分と余裕だね」

「負けた時の言い訳にされても困るからな。油断してついた傷の所為で全力が出せなかった、とな。貴様はきつちりと、徹底的に完膚なきまでに圧倒的な力で倒さないと意味がない」

この女に恨まれるような事をしたっけか。

思い出せないが記憶に残っていないのか、それとも無意識にしてしまったことか。

そのどちらかと結論付ける。

随分と綺麗な美貌と、意味が重複した例えが似合う顔が獰猛な笑みで歪むほど恨まれているらしい。

女の恨みというものは陰湿で長引くのが世の常だが、原因が分からない以上謝りようがない。

左手で握る刀をクルリと回し逆手で握り直す。

分からないのならば、勝って聞きだせばそれでいい。

仮に謝るとしても、謝るのはそのあとだ。

納得が出来ないのは相手の問題だ。

間合いを詰め、振り上げ。

当然避けられるが、振りぬいた力を利用して反転。

逆手に持った左の刀で刺突を放つ。

「はあっ！」

俺の攻撃を避け、反撃に出ようとした剣を引きもどし、女が刺突を
はじく。

が、ここで旋回を止めない。

くるくると独楽のように回転し、もう一度横薙ぎの斬撃。

既に剣の刺突が弾かれている女は受け止める事も逸らすことも出来
ずに、後退し避ける。

旋回を止めず、剄を左手の刀身に収縮させる。

【外力系衝剄 閃断】

刀身に集められた剄が三日月状の鋭利な刃となって飛翔する。

あまり手の内を見せたくない俺は、誰もが習う技を使う。

基本中の基本の技。

しかしそれは俺が使うことによつて、異常を見せる。

平均的な閃断の大きさのゆうに三倍以上の強大さの刃。

横一文字に飛翔するそれを避けようとする女が瞳に映る。

【内力系活剄 旋剄】

足に集中させた剄が俺を爆発的に加速させた

さっきの試合内容を思い出して一人反省会をしていた俺は、右手に握った雑巾で丁寧に板張りの床を拭いていた。

身体にできた大小の傷のほとんどは活剏を用いて治療したが、油断してつけられた傷だけはまだ鋭い痛みを俺に与える。

二度ふさいで開いたからなあ。

ただただ反省ばかりが残る試合内容だった。

それに

「私は認めないからな」

勝敗が付き、互いに傷つきながらすれ違った時に耳元で囁かれた言葉。

まったくもって心当たりがなかった。

しかしあそこまで憎悪、嫌悪されるほど恨まれるようなことを俺はまだしていない。

考えれば考えるほど謎。

掃除をしていた俺の手が止まったことを不思議に思った男、この部屋の主にして天剣が一人リントンス・サーヴォレイド・ハーデンが俺を黙って見ていた。

俺の元師匠。

と言えば聞こえはいいが、ただ物々交換をしていただけの間柄。

リントンスは己が技術を。

俺は前世の知識を。

俺が超弦理論やくりこみ理論などを偶々披露する機会があり、何かの琴線に触れたらしい。

その他に色々は無駄知識をリントンスに披露し、リントンスはそのお詫びなのか鋼系の技術を教えた。

その時にこの古い部屋に泊まり込んでいたのだが、とてもではないが人の住める部屋ではなかった。

だから俺は毎日鍛錬が終わった後に掃除をしていたが、鋼糸の使い方を習い終わった後でも月一の習慣として、今も掃除をしに来ている。

「如何した」

無駄に渋い声色。

内容などを省き、ただただ分かり辛い問いかけ。

しかし天剣授受者、いやリントンスが他人の心配をするなど、彼を知っている者が聞いたとすれば、明日は雨が降るのかと心配するほどの出来ごと。

それほどまでに彼は周囲に対して無関心を貫き、自身に対しても強さ以外に関して無頓着なのだ。

「ちよつとした考え事」

リントンスに声を掛けられて、掃除を再開した俺は適当な返答をする。

「アレか？」

「それもあるね」

「アレはもう諦める。そう生まれてきた以上、俺たちにはどうすることも出来ん」

「仕方ない、で済ませられるリントンスはいいよ」

常日頃のアルシェイラの奇行を思い出して、溜息を吐く。

そんな俺の様子を見て、リントンスもアルシェイラの奇行を思い出したのか、はたまたグレンダンを訪れた際にフルボッコにされた時のことでも思い出したのか、仏教面に苦いものが奔る。

「まあ、今の状態も昔と比べたら随分と落ち着いてるんだろっけど」

水を張ったバケツで雑巾を洗い、絞る。

一度で真っ黒に濁る水を見て顔をしかめながら、また拭き掃除に戻る。

「……あれから、鍛錬は続けているのか？」

「才能がないことは端から分かってたから今はもう。現状維持に努める程度のことしかしてないよ」

一通り床を拭き終えて気づく。

窓や壁にへばりついた埃の存在に。

考え事をしていた所為で、何時もと手順を違えた。

壁や天井などの埃をはたいたら、床に落ちる。

折角綺麗に拭いた床をもう一度拭き直すのは面倒臭い。

月一という数少ない掃除だが、俺は姉もこの部屋を掃除していることを知っている。

だから今回はこれくらいでもいいか、と思った。

バケツの水を開け放たれた窓から外に投げ捨て、掃除用具入れにバケツをしまいこむ。

雑巾は絞ったといってもまだ湿っているため、展開されっぱなしの、リントンスの鋼糸を剝で強化した手で引きはがし、日当たりのいい所に括り付けて、雑巾を吊るす。

「それじゃあ、また来月。ビールとかの空き缶はビニール袋にでも入れて纏めておいたから、自分で出しといて」

トイレに備え付けられた洗面台で手を洗って、ツヴァイはドアノブ

に手をかける。

「あ、ちゃんとリサイクルの日に出しといてよ」

この男なら、燃えるゴミの日でも埋め立てゴミを平気で出す可能性が無きにしも非ずなので一応注意しておく。

「アルシェイラには、もう来るなと伝えておけ」

部屋を出る際に、ぽそりとリテンスが言った。

実際にツヴァイは見たことがないがアルシェイラは気分が向いたらメイド服を装備して掃除にやってくる。

グレンダンの女王にそんなことをやらせること事態は物すごい。

が適当に掃除機をかけるだけなので、埃が舞って全然綺麗にはならないし、リテンスからしたら迷惑なだけだ。

だがしかし、いくら弟でも姉に言っていていいことと悪いことがあるわけ……

「それ、無理」

ドアの隙間から言った。

姉の楽しみを取るなんて、弟として出来るわけがないのだから。
閉めたドアの向こう側から、リテンスの溜息が聞こえた。

二年前から週一から月一へとシフトしたクラリーベルの稽古。

この稽古の締めとして最後にやっている真剣勝負。

始めたころは数刹那で地面に転んでいたクラリーベルだが、ここ数年で随分ともつようになってきた。

師匠役としてこれほどうれしいことはないね。

俺の全力の斬撃を掻い潜り、クラリーベルの刃が俺の懐へと舞い込む。

それを剄で強化した手で払いのけ、間合いを取りなおす。

「上々。随分ともつようになってきたじゃないか、ベル」

「ええ、それは。何度もお兄様に殺されかけましたから、これくらいは」

構えを崩さず、俺の隙を見逃さないようにしながらクラリーベルは微笑む。

会話の合間に傷だらけになった身体に剄を回して治療をしているようだ、無駄に流れて身体から出て行っているのが見える。

剄の精密コントロールをクラリーベルが習得していないのは一目瞭然。

俺は戦い方を教えてはいるが剄のコントロールにまで、月一の稽古では手が回らない。

仕方ないと言ってしまえばそれまでだが、それでも他の人人間が教えていてもおかしくない技術だけに、ティグ爺への不満が積もる。

大事な孫娘なら、基礎に等しい技法くらい教えておけよ、と。

十数秒。

ゆっくりと間合いを推し量りながら、刀として復元された錬金鋼の鐔が鳴る。

「され、次の一合で仕舞にしようか」

「はい」

往くぞ、とは言わなかった。

一瞬で剄を足に回し、急加速。

地面を擦る様に移動し、土煙があとを追う。

クラリーベルの背後に回り込み、振り上げ。

それに反応したクラリーベルは半見捻って刃を受けとめながら、後方へと自ら飛び衝撃を受け流す。

そのまま数メートル後退する彼女の足が地に着く前に、たたみかける。

一歩前へと踏み込み、間合いを詰め、振り下ろす。

振り下ろそうとして、違和感。

久しく感じなかった感覚に振り下ろした切っ先は迷い、クラリーベルに届かずに止まった。

「……お兄様？」

クラリーベルの戸惑いが声になって届いた。

そして気付いたのか、息を飲む音。

空間が、止まっている。

空気が淀んでいるような感覚。

同じものを彼女も感じたんだろう。

戸惑うクラリーベルを抱きよせ、検体に入っている十数の錬金鋼の
一つに触れる。

「レストレーション」

錬金鋼に剉を流し込み、復元すると同時。

突然何も無い空間から陽炎のごとく現れた、奴ら。

皆等しく悪趣味な獣の面で素顔を隠し、歪な形をした剣を携えている。

それらを等しく復元した鋼糸で瞬殺する。

悲鳴を上げる間も、何の行動も起こさないうちに。

等しく欠片も残さず微塵切りにした。

「ああ、最近んは見なくて済むようになったのに」

この意味不明で悪趣味な変態的で数だけが多いという、どごぞの黒虫を連想させる弱者を相手にしてきた。

八年ほどの付き合いで意図的に見ないで済むようになってきたというのに、何故か今日になってまた見てしまった。

それはクラリーベルが関係しているのか。

近くに見る事が出来る人間がいたからこそ、そっち側に引っ張られてしまったのか。

はかり知ることとは出来ない。

引きよせていたクラリーベルを離し、表情を見れば啞然。

彼女は彼女であまりに突然の出来事に啞然としていた。

「お、お兄様。先ほどののは一体？」

「俺も知らない。けど分かることは、あれは俺の敵だ」

しかしこれはこれで都合がよかった。

クラリーベルが何も知らないまま独り、奴らの相手をするより、初めに俺が居た。

クラリーベルにとって幸運だろう。

「付いて来い。この空間から出る方法を教えてあげるから」

「は、はいっ」

何とはなしに分かる悪趣味共の位置。

感に近いそれを頼りに黙々と歩き、路地裏へと進んでいく。

狭い曲がり角を曲がろうとした瞬間に襲いかかってくる奴らを、復元したままの鋼糸で切り裂き、奥へと入っていく。

奥にはまだ十数ほど居るのを感じ取れた。

「クララ、実践テストだ。奥にさっきのと同じような悪趣味の権化が十数人いるから殺してきて」

殺す、という言葉にクラリーベルが反応した。

そんなことをしているのか、という顔で俺を見上げる。

「大丈夫だよ。あれは人間じゃあなくて汚染獣に近いから。何処からともなくゴキブリのように湧いて来るし、そもそもあいつらを全滅させないとこの空間から出れないんだ」

だから人殺しとは違うから心配しないでいいよ、彼女の頭を撫でて安心させようと努める。

「期待しているよ」

その一言でクラリーベルの表情は変わった。

嬉しそうに顔を綻ばせ、はいと言うと元気よく裏路地の奥へと駆けていった。

その後ろ姿を見送り、先ほど歩いてきた道へと振り返る。

接近には、周囲の剽を感じていて気付いていた。

そこにいるのは三王家が最後の一人、ミンス・ユートノール。

「ああ、これはこれは従兄殿。こちらの方はクララに行かせましたので大丈夫ですよ」

「貴様正気か？ なぜクラリーベルを行かせた」

「何故、とは？ クララのごことが御心配で？」

「誰が。俺はただ貴重な三王家の血をあのような輩に流されるのは我慢ならんだけだ」

「でしたらその御心配は不要かと」

「何？」

「軟な鍛え方はしていませんので」

「だったらいいがな」

「それよりも従兄殿。残りをお願いしたいのですが」

「なっ。 貴様、鬼か！ この感じではまだ数十は残っているぞ」

「俺はここでクララが無事にあいつらを殺せるのか見届ける必要がありませんから。」

「それに数十程度従兄殿ならば楽勝でしょう？」

「三王家の一人なのだから。」

「言外に言った。」

その言葉の意味を正確に理解したミンスの反応は決まっていた。

「当たり前だ、俺を誰だと思っている。三王家 ユートノール家が
当主、ミンス・ユートノールだぞ。
貴様はクラリーベルの心配でもしておけ」

言い残して、ミンスは活剽で身体能力を強化し、一気に三軒隣の屋
根へと駆けあがり、そのまま残りの悪趣味共が居る方向へと消えて
いった。

「いやはや、甘いね。あの坊ちゃんは」

自分の家の名に振り回されるとは。

道化の行動に声もなく笑った。

駆ける。

期待と不満を織り交ぜながら、クラリーベルは路地裏を走っていた。違和感が強くなる方へと。

三王家として生まれ、この世で最も濃い血筋であるが故に理解出来る違和感。

その違和感の正体こそが、一瞬だけ見た獣の面で顔を隠した者達なのだ。と直感で理解していた。

アレはこの世界に居ていいものではない。

血がざわつくのを感じながら走り続け、行き止まり。

しかしここが正しいのだと、違和感が告げる。

そのことに戸惑いを感じていると、先ほどの焼き回しのように獣面の悪趣味共が忽然と姿を現した。

クラリーベルを囲むように。

悪趣味共は、クラリーベルを待っていたかのように語りかける。

「イグナシスの思想の元に、我々は

」

遮る。

復元していた錬金鋼を一振りし、クラリーベルは一步前に出た。

「貴方方の戯言を聞いている暇などありませんし、聞く気もありません。」

お兄様の敵だというのなら、それは私の敵。私怨はありませんが、ここで散ってください」

悪趣味で、突然現れる変質者。

そしてツヴァイが敵と断言した者の話など、聞く必要がなかった。

故に声を遮る。

「貴様は、貴様らが住んでいるこの世界こそが偽りであると」

一人の獣面が大業に語りかけるが、クラリーベルはまたも無視し、そいつを切り裂く。

返し刀で纏わせた剄を放出し、五人ほど吹き飛ばす。

「だから、聞く気はないと言ったでしょう。それに私は今、少々不機嫌です、ええ立腹です。」

折角お兄様が私に稽古を付けてくれていたというのに、貴方方の所

為で台無しです。 この不満、死をもって償って下さい」

そこから先は、言葉は無かった。

出現した時と同じく陽炎のように、動かなくなった獣面は消えていく。

クラリーベルはただ、斬って斬って斬って、薙ぎ払い、突き刺して、弾き飛ばす。

一人、また一人と確実に止めを指していき、たった数分で最後の一人となった。

「イグナ

最後の最後まで、語りかけてくる獣面の言葉を無視し、振りかぶった片刃剣を振り下ろした。

倒れ伏した獣面が陽炎のように空気に溶け、消える。

それを見、終わった事を確認した後、呟く。

「……まったく、台無しです」

鍛錬服を翻し、クラリーベルは敬愛する従兄の元へと駆け足で向か

つ
た。

闇の帳が下り、窓の外が絵具の黒色で塗りたくられた頃。

小さな孤児院の一室に孤児の子供たちを集めて勉強会をしていた。

年少組は皆、席に座っている、というよりも突っ伏していた。

一日二時間の勉強会。

遊びたい盛りの年少組にとって、元々勉強会が嫌いだ。

しかし俺が教師役を担当するようになってから、勉強嫌いに拍車がかかったように思う。

阿鼻叫喚の大合唱。

グレンダン小等部でならう勉学を教えているだけなんだが、な。

スパルタ過ぎたか？

今日の内容など九九をカンペありで言わせ続けるだけだから、そこまでしんどくはないはずだが……

子供たちはたった二時間で声が枯れ、気力も萎え、正に死屍累々の体をさらしていた。

なんというか、ジェネレーションギャップを感じる。

ゆとり教育を受けた子供を見ているような感じが。

だが、九九を覚えるのには口に出して言うのが一番覚えやすいものだから、これくらいは頑張ってもらわないと困る。

ただでさえ、孤児院の子供たちの学力は低いのだから。

今のうちに苦勞しておかないと、大人になった時にさらに苦勞することになるだろうよ。

だからだらしなない恰好をしたまま九九を唱えさせるのは、決して俺がドSだからではない。

子供たちの九九をBGMに、俺はリーリンとレイフォン、年長組の抜き打ちテストの採点を終える。

採点したテストを二人に返し、もう今日の勉強会は解散だ。

しかしこの勉強会の教師役として、俺には最後の役目があった。

「レイフォン・アルセイフ」

答案用紙を穴が開きそうなほど見つめたまま固まっているレイフォンが、油の切れたブリキの玩具のように、首を動かす。

その表情は囚人が、今から吊るされる荒縄の前に立たされた時のような情けなさ。

気分は死刑囚の罪状を読み上げる裁判官のように、俺はレイフォンに対して死刑宣告にも等しい言葉を口にした。

『Re：write』
第一章・ビギニング・セカンドライフ (04)

レイフォン・アルセイフは人生で何度目かの危機に瀕していた。

美味しいはずの料理の味も分からなくなり、無理して食べても喉に引っかかる。

レイフオンは前方の席を見るが、そこは空席。

その席の主は既にもいない。

何時もなら年少組が食べ終わるまで水を啜っているはずだが、今日は早々に食べ終わり席をはずしていた。

理由は分かっている。

分かりたくもない、というのがレイフオンの心情だがそれでも分かっているものは仕方がなかった

そしてその行動が示すツヴァイの本気の度合いに、恐怖していた。

土下座して如何にか。

いやそれは前々回にした。

如何にか回避できる方法を探すが、選択肢を捻りだす作業自体が不毛な上に、出てくる案は根本的な解決に至らない。

逃げだすという考えが一瞬頭を掠めるが、前回逃げだそうとした瞬間に、剄で押しつぶされて連行されてしまった。

というよりも、同じ家に住んでいる以上、それは死亡フラグ以外の何物でもなかった。

何時も勉強を教えてもらっているリーリンに何か妙案はないかと視線を投げかけて、助け船を期待するもことごとく封殺されている。

彼女はツヴァイの味方なのだ。

子供たちのお菓子を人質にとる際にも、リーリンは協力者とし活躍しているのだ。

以前、リーリン達女の子の部屋に問答無用で入り込み、押入れに身を隠した時など普通に密告され、襟首を掴まれ引きずられていくのを、売られていく哀れな子豚を見るような目で見られた。

年少組みの子供たちの瞳を思い出して、その後起こった地獄を連鎖的に思い出してしまい、レイフォンは震え上がる。

これから始まる地獄と比べて、汚染獣と戦う方がまだましだった。

分母や分子といった数字に悪戦苦闘し、円錐の体積を求めたところで日常生活の何処に役立つのかと。

誰もが一度は考えるであろう処に考えが行き着くが、そんなこと面と向かってツヴァイに言えるほどの度胸などレイフォンは微塵にも持っていない。

まだ戦ったことのない、汚染獣の最上級である老生体と戦った方がましだとさえ考えてしまった。

戦う。

不意にレイフォンの頭の中に天啓が閃いた。

食事にも関わらず、両手で頭を押さえたり、髪を掻き毟っていたレイフォンは、不意に名案でも浮かんだのか顔を上げる。

そして、腰に手を回し、付けっぱなしだった剣帯にある固い感触を確かめる。

これがあった。

だから

食事を終え、小さな子供たちの食事の面倒を見ていたリーリンは、レイフォンがまた馬鹿なことを考え付いたな、と思い、小さく、本当に小さくレイフォンに気付かれないように溜息を吐いた。

もはや闇の帳が完全に降り、辺りを漆黒に染め上げ、静寂に包まれる中、レイフォンの声だけがそこに響く。

「レストレーション」

レイフォンは、ツヴァイに指定された待ち合わせ場所へ向かう途中で、腰の剣帯に差してあった錬金鋼を引き抜き復元させた。

手にはレイフォンの体の大きさに合わせた太刀。

月明かりに照らされ、その刀身が鈍く光る。

殺到で出来うる限り剄と気配を殺し、ゆっくり足音を立てないように道場裏へと歩いていく。

レイフォンにとって今回の敵は難敵。

だが、ソレを従える者ならばどうにかできる。

そうレイフォンは考えていた。

しかし、気を許すことは出来ない。

一つの油断が命取りになるし、一体何故彼は食事中にいなくなったのか。

それを考えると、待ち合わせ場所半径百メートルは既に彼のテリトリーと思っている。

そしてここは、目的地の八十メートル後方。

慎重すぎても、慎重すぎることはなかった。

手に掻いた汗をズボンで拭い、錬金鋼を握り直す。

緊張で乾いた喉を、ツバを飲み込んで潤す。

ここで勝たなければ、レイフォンは地獄を見る。

勝つ。

そう、殺す必要はないのだ。

義父に教わっているサイハーデン刀争術の技を使えば、相手の体を痺れさせる事が出来る。

取り合えず、十日ほど寝たきりにすればいいか。

そうすれば、彼もレイフォンの力を認めて、あんな事をさせないかもしれない。

可能性は少ないが、ゼロではない。

冬季に入ったはずのグレンダンの夜。

何時もなら寒いと感じるはずの夜だが、今日はやけに暖かい。

もう一度、レイフォンは掌の汗を拭い、ゆっくりと歩く。

もう曲がり角を曲がれば、目的地は目と鼻の先だった。

一歩踏み出し、同時に静かだった夜がざわつく。

剄の流れを見ることが出来るレイフォンは、相手の初撃を避ける事が出来た。

錬金鋼を極細の糸に復元させ、剄を通して操る鋼糸の技を。

避けるが、糸先が変化。

レイフォンの腕に絡みつくが、刀で切断し、糸から距離を取る。

ツヴァイだ。

鋼糸が迫り、身を振り刀で叩き落として如何にか糸に捕まえられないを防ぐ。

「よお、レイフォン。随分と物騒なものを持っているな」

ツヴァイの声が闇から響く。

姿は見えない。

恐らくこの曲がり角の先にいるのだろう。

分かってはいるが、レイフォンは曲がり角を曲がれない。

いや、それどころか迫り来る鋼糸に対応していて、少し後退する。

ジリ損だった。

これじゃあツヴァイのところには辿りつけない。

また、鋼糸を切断し、蠢く鋼糸から距離を取る。

剽の流れがやけに見辛い。

夜ということ差し引いたとしても、ほんの微かにしか剽の流れを捕らえる事が出来ない。

不思議な感覚。

冬季のはずなのに、蒸すように生温かい温度。

そして夜であることは関係なく、読み辛い剽の流れ。

これは

「気付いたか？ それともまだ気づいてないか？ まあ、どっちでもいい。

ネタをばらしてとっ捕まるほど俺も間抜けじゃない。次で決めさせてもらっぞ、レイフォン」

また、闇からツヴァイの声が響く。

居場所は分かった。

けれど、レイフォンの攻撃射程圏外にいるし、剽を溜めての遠距離

攻撃を行う隙など無かった。

全部で二十本の鋼糸がレイフォンへと殺到する。

斬ったら斬ったで直ぐに鋼糸が補充され、二十本の鋼糸は一向に減らない。

それどころか、レイフォンに絡まる糸が徐々に増えてきた。

「くっ…そう」

サイハーデン刀争術の技を使えば、全ての鋼糸を吹き飛ばし、ツヴアイの下へ行けるかもしれない。

しかし道場の近くである以上、派手な剄技は使用できない。

だから手詰まり。

ここはもう、逃げるしかなかった。

逃げて、孤児院の何処かに隠れる。

それを選択した。

剄を足に集中させる。

集中させた剄で脚力を大幅に強化し、全力で後ろへ飛び退る。

その速度は、ツヴァイが賭け試合で見せた旋廻をも上回る。

【サイハーデン刀争術 水鏡渡り】

残像さえ残さない高速移動で、鋼糸を逃れ、ツヴァイの支配領域から離れていく。

九十メートル。

指定された場所から離れ、気が緩む。

ツヴァイの鋼糸はレイフォンに追い縋るが、もう五十メートルほど後ろ。

「おい、次で決めるって言っただろ？」

嫌に響く声だった。

そして足元に、何かが引っかかる不吉な感触。

引っ張られ、空中へ放り出される。

三半規管が揺さぶられ、空が地面で、宙が大地になる。

上が右に、下が左へと変化し、地面からの熱烈な接吻で、レイフォンの空中浮遊は終わりを告げる。

訳が分からなかった。

糸の追従は既に振り切った、はずだった。

なのに今の状態は何だ。

「な、なにが……？」

地面に落ちた時に唇でも切ったのか、血の味のする口で、レイフォンは言葉を紡いだ。

本当に訳が分からなかったのだ。

ツヴァイが同時に操れる鋼糸の数は二十本。

前にそういう話をしていたし、レイフォンも相手取って、確信していた。

そして鋼糸のスピードは速いが、水鏡渡りの速さには及ばない。

はずだった。

しかし実際はレイフォンの足に絡まり、地面に叩きつけられていた。

「なにが、ってそりゃあ、自分が馬鹿だって認めることだ。

こんな所に錬金鋼持ってノコノコ現れて。勝てると思ったのか、

俺がたつぷりと罫を仕掛けたこの場所で。

どうせなら何処かへ逃げるか、錬金鋼を持たずに素直に来れば良かったんだ。だから無駄な力を使って、怪我をする」

そう言いながらツヴァイがようやくレイフォンの傍に現れる。

「それに、一体何がって聞いたとして、俺が何をしたのか答えるだけでも？」

常に二番手以下な俺が手品の仕掛けを教えたら、唯でさえ弱いのに更に弱くなるだろ？」

足を鋼糸で拘束されていたレイフォンの体に、鋼糸が巻きつく感触。

しかしレイフォンに鋼糸を通る剝を見る事が出来なかった。

ということとは、そういうことなのだろう。

剝を用いず、鋼糸を操っているということだ。

それがレイフォンの至った結論。

確かに鋼糸を手首や腕の動きで操る術はある。

それをここまでの精度で出来るというのは驚嘆に値する。

恐らく天剣授受者であるリテンズでさえ、出来ないことだろう。

まあ、彼の場合は剉を通して鋼糸を操ることが専門なので無理も無いが。

鋼糸がゆっくりとレイフォンの両手に巻きつき、体を簞巻きのように固める。

「お勉強の時間だ」

レイフォンを剉の通った鋼糸で持ち上げ、道場の中まで連れて行くツヴァイ。

そこにはスポットライトに照らし出される二組のイスと机。

もちろん上には算数のドリルが置いてある。

「うわっ…いやだああああああああっ!?!」

それを見てレイフォンは叫ぶ。

もはや本人にとってこの光景はトラウマ。

過去数度にわたり見てきた地獄を思い出させ、そしてこれからその地獄を体験させられるのだから。

暴れるレイフォンの足をイスに縛り付けて、鉛筆を持たせる。

「さて、お楽しみの時間だ」

ツヴァイの怒声とレイフォンの悲鳴が夜の道場に響き続けた。

04 (後書き)

ここまでが改訂。

いやしかし、新しい話を書くより修正とかのほうがかかって
どうしてだろう？

他の皆さんもおんなじような感じなのだろうか？

05 (前書き)

ハッピーニューイヤー、新年明けましておめでとつとは言えない来年。
年。

来年こそはいいことがありますように自分。
年男になる男の小説投稿します！

事の発端は偶には顔を出そうかな、という軽い気持ちだった。

小まめに顔を出さないと、俺への扱いが酷くなるからな、あの入。

まるでリンの部屋みたいなものだ、などと失礼な事を考えていた所
為だろうか……

あんなことになるとはそのときの俺は露にも思わなかった。

もし、過去の自分に助言が出来るなら言ってやりたい。

行くのは明日にしておけ、と。

いや、やはり言うつのは止そう。

だって過去の俺だけあんな惨事を回避する事が出来るだなんて、な
んか気に入らないだろ？

『Re:write』

第一章：ビギニング・セカンドライフ（05）

今日は気分が良い。

何気ない幸運が朝から連続しているからだ。

・寝起き 何時もはレイフォンに起こされるのに、今日はリーリンから起こされた。

・朝食時 珍しく、ベーコンが食卓に上った。なんでも特売で安かったらしい。

・十時頃　賭け試合で雑魚を瞬殺。　意外と賞金が多かった。

・十二時頃　昼食を外で済ます。　頼んだものと違うメニューが来て、注意したら頼んだメニューと二つとも貰えた。

・昼食後　腹ごなしに散歩していたら、札を拾った。　三枚も、だ。

ここまで運がいいと、誰かにお裾分けしたくなってくる。

知り合いの不幸そうな人、不機嫌そうな人の顔を思い浮かべる。

リントンスは却下。

先日行ったばかりなのに、人嫌いの気があるから今日も行ったら不機嫌になるのは見えている。

カナリスも却下。

この前一緒に飲みに行ったばかりだし、今は陽が高い。

それにアルシェイラに代わって執務中だろう。

となると知り合いで思い当たる不機嫌さんは、一人くらいしかない。

馴染みの花屋でバイトの店員に、明る目の花を適当に見繕ってもら

少し歩いて、花束を片手にドアをノック。

反応がないが気配ははっきりと家の中にある。

どうやら一つの場所で何か作業をしているらしい。

玄関マットを捲り上げ、下に置いてある合鍵を鍵穴に差し込み鍵を開ける。

そしてマットの下に鍵を戻してから、そっとドアを開けて閉める。

「お邪魔します」

一応、礼儀としてそう言うが、返事は返ってこない。

まあ、大体こんな感じなので、特に気にしないが。

リテンンスと同じで、天剣授受者にしては珍しく豪邸に住んでいない人。

まあ、リテンンスと比べれば、家の規模もデカイし綺麗なのでまだマシと言えるのだが。

というか、グレンダンの端にある魔女が住んでいそうな雰囲気を出す小さな屋敷という時点で、なんでか天剣授受者の家と言われて納得できてしまうのが悲しい。

俺に銃術を教えてくれた彼女は、エントランスから見えるリビングルームで机に向かっていた。

集中を要する作業なのか、俺がリビングに入ってきたことにも気付きはしても、振り返ったり、俺に声をかけることはしない。

代わりに鉄を削る音だけが、リビングに響く。

趣味に没頭することはいいことだが、もう少し女らしい趣味にして欲しい。

編み物とか、料理とか。

まあ、姉でもないし、血縁というわけでもないのでもいいけど。

リビングから続いているキッチンへと足を運ぶ。

リントンスの家とは違って、実に綺麗だ。

侍女が来ていることもあるが、料理とか洗濯の仕方を教えた甲斐があった、と思うべきだろう。

確りと食器は食器棚に並べられているし、洗った直後のやつは水切りの上に置いてある。

シンクも床も綺麗に磨き上げられている。

これは、料理とか家事を教えた甲斐があったな。

リントンスと比べて大違いだ。

もっとも、リテンヌと比べられたと知ったら、顔をしかめて悪態を吐かれるだろうけど。

棚から花瓶を取り出して一度濯ぎ、中に水を入れる。

花束を置いてあるリビングに花瓶を持って行き、花を活ける。

慎重に作業中のテーブルの中央に置く。

それだけで、この少し暗い魔女屋敷のリビングが明るく見えた。

うん、明るめの花を見繕ってもらって正解だったな。

ガチャガチャと鉄を弄くる彼女は、大絶賛俺を無視中。

何時も間が悪い時はこんな感じなので、気にならなくなったけどね。

カナリスがアルシェイラに抱く締めと同じ極地なんだろうな。

しかし研磨したりサイズを測ったりと、忙しなく動く指を見ていると退屈はしない。

物凄い速さで作られていく銃を見ているのは、実際楽しい。

何時も違う造形や柳眉な彫刻を見ていると、別に天剣じゃなくてもその手の職人として食べていけるのではないかと思わせる。

一時間か、いや三時間ほどその作業を見続け、四時頃。

グレンダンが冬季の地域に入ったのか、ここ最近日が沈むのが早くなってきており、部屋の中が薄暗くなってきた。

俺はそつと立ち上がり、この部屋の電気をつけて、また席に戻る。

座り直して十分くらいだろうか、もはや匠の域に達した神速の指先がピタリと止まる。

未だに銃はその完成を待っている状態で、その身はバラバラのまま。

目線を彼女の指から上げれば目と目が合う。

ブラックメイクとでも呼べばいいのか、黒く塗られた目元が俺の目に映る。

青色のルージュを引いた唇が、ようやく開く。

「何時の間に家に入り腐った、このクソ蟲」

化粧の趣味もあいまって不健康そうな肌の色をした天剣授受者、バ
ーメリン・スワツテイス・ノルネは、何時も通りの罵倒で、俺に挨拶をし腐った。

とぼとぼと、日の暮れた街並みを歩く。

地平線の向こう側を見れば、燃え盛る太陽の残滓が、オレンジ色のラインとして微かに空に映っている。

隣にはメリンさん。

ブツブツと何かを呟きながら、俺の服の裾を引っ張って歩いている。

「クソクソクソクソクソクソクソクソクソク、集中が途切れた。久しぶりにいい感じだったのに目障りなんだよ、このクソ蟲が」

魔女がかぶるような帽子をかぶり、露出激しめの上着を着、細い足が丸々見えるパンツを穿き、編みタイツを穿いている。

メリンさんがブツブツ呟いていると、その不健康そうなメイクと相俟って、恐ろしいほど不気味に見えるのだろう。

そんな彼女に引つ張られる俺はさながら、悪魔の供物として捧げられる生贄といったところか。

行き先も告げられず引つ張られていくが、大体の見当は付いている。

しかしあそこに行くのなら、孤児院に連絡を入れないといけないのだけだな。

メリンさん、放してくれないし如何しようか。

などと考えていたら星が見え始めた空を背に、レイフォンがこっちに歩いてきた。

戦闘服を着ているところを見ると、何処かの大会の帰りなのだろう。大きな大会にでも出てきたのか、その手には紙幣が入っているのだろう。皮袋を握っている。

まあ、賭け試合と比べれば微々たる金額でしかないのだろうか。

眠たそうな顔をしたレイフォンが、こちらに気付く。

俺とメリンさんを見比べて、果てしなく変な顔をした。

「ようレイフォン、帰るか。成果はどうだったって、訊くまでもないか」

「うん、勝ったよ」

さも当然といった感じで言い、手にある皮袋を掲げる。

確かに、今のレイフォンに勝てるのは天剣授受者や女王ぐらいのものだ。

当然と言えば当然の結果と言えるな。

「そつだレイフォン」

「うん？」

「今日晩飯はいらなくてリーリンに言っておいてくれないか。あと帰りが遅くなるとも」

「分かった」

眠たそうな目をしながら、レイフォンは頷く。

これで何の心配もなしにメリンさんに付いて行ける。

「それじゃあ頼んだぞ。真っ直ぐ家へ帰れよ」

「兄さんに言われたくないよ」

バイバイと手を振ってレイフォンと分かれる。

レイフォンの後姿を曲がり角に曲がって消えるのを見届ける。

「さて、メリンさん。お待たせしました、行きましようか」

俺とレイフォンが話している間、一言も話してこなかったメリンさんに向き直る。

「クソ待たせやがって、それにその腐れ渾名で呼ぶな」

嫌がるような素振りを見せているが、実力行使に出てこない以上、それほど嫌がっていないと判断。

前にバリンさんと呼んだ時は、問答無用で体に風穴開けられたし。

レイフォンに声をかけたときに急いで放した俺の裾をもう一度握り直して、先を歩くメリンさん。

ごちゃごちゃと入り組んだ路地裏を歩いていき五分程。

少し開けた場所にポツンとある一軒の店が現れる。

B A R 深海魚

店長も店員も、店の客の事情や背景に特に頓着がなく、俺やメリン

さん達天剣のような有名人や後ろ暗い事がある人間にとっては、とても助かる店だ。

俺が小さい頃に通い詰め、修行した店でもある。

無駄にカラフルなイルミネーションで飾られた看板を見て、ドアを開ける。

照明を押さえて薄暗くされた店内に、ミラーボールのライトの光が忙しなく辺りを巡っている。

何時もと変わらない店の様子に、思うことはなく、メリンさんの指定席である店の暗がりを目指す。

「わ、わたしなんて、わたしなんて、どうせ地味で胸無しで、存在感薄くて……でも、色々頑張ってるんですよ！」

牛乳飲んだり、この前放送でやってたシェイプアップとかいうので胸を大きくしてみようとしたり。

あの人の影武者として役に立ちたいのに、与えられる任務は護衛とか入れ替わりとかじゃなくて、書類仕事、机仕事とかばかり。

あの人が勝手にサボって溜め込んだ山のような……いえ実際山の書類処理を一日でしろ、とか言ってる。

鬼ですか、あの人は！ いえいえ、滅相も御座いません、あの人はこのグレンダンの女王でおあせられます。

綺麗で、カリスマに溢れ、メロン見たいなオツパイをして……ピー歳の癖に、ピー歳の癖に、ピー歳の癖にいい。

馬鹿みたいに多い剽を無駄に使って、若作りして。どうせあの胸に剽を詰め込んで、膨らましているんだあ

……なんか、凄く係わり合いになりたくない人がカウンターでママさんに絡んでる。

一瞬だけ目線を動かして誰か確認しようとするが、後姿で、しかも机に伏せているので背中しか見えないから分からないが、ママさんが困ったように苦笑いしているのが目に入った。

って、ママさんと目が合った。

「おさけ〜 おさけくださいい、ママさん〜……………?」

ママさんに叫ぶ女性がママさんの目線が自分に向いていないことに気づき、こちらを振り向く。

「あ、ツヴァイさんじゃあないですかあ 奇遇ですねえ

酔っ払い特有の気変わりの早さで、さっきまで影を背負っていた女性 カナリス・エアリフォス・リヴィンは物凄く晴れやかな声を上げ、間の抜けた笑顔で、店内にいる他の客のことなどお構い無しに、ブンブンと手を振ってきた。

それを見たメリンさんの顔が、物凄く嫌そうに歪んだのが見えた。

「ごめんなさいね、ツーちゃん」

お茶目な感じで確信犯なママさんが、ウィンクと共に謝罪を述べた。

恨みますよ、ママさん……………

レイフォンは、ツヴァイたちと別れた後、ツヴァイの言葉に従って
真っ直ぐ孤児院に帰っていた。

玄関の戸を開けば、レイフォンよりも年下な子供たちがレイフォン
に群がり、レイフォンで遊ぶ。

「レイー、今日もかった、かった？」

「おにいちゃん、おやつ作って」

「だいとさわらせてー」

聖徳太子でさえ根を上げる子供たちの声の重奏に戦闘能力と家事能力以外がポンコツなレイフォンに聞き分けられるはずもなく、何時ものように困った顔を浮かべながら一人一人の質問を聞き直し、答えていく。

質問の雨霰が途切れるのを見計らい、台所へ。

やんちゃな子に体をよじ登られながら、台所に続く扉を開ける。

そこにはリーリンが年下の女の子たちに料理を教えながら晩御飯の仕度をしているところだった。

「リーリン、レイが帰ってきたよー」

レイフォンによじ登っている子が元気良く言う。

その時にレイフォンはバランスを崩し、よじ登っている子を落とすそうになるが活剏を足に集中させ、体勢を立て直す。

「お帰り、レイフォン」

振り返らず料理を続け、言葉だけを返すリーリン。

「ただいまリーリン。ああ、兄さんからの伝言」

「お兄さんから？」

「うん、今日晩御飯いらないうて。あと帰ってくるのが遅れるって」

レイフォンの言葉に、リーリンの大根を切っていた手が止まる。

「誰かと一緒だった？」

振り返って笑顔で訊いてくる。

「うん、女の人と」

「良くここに来る人？ それとも、よく話しに聞くお兄さんのお姉さん？」

「う、ううん。知らない人、だったと思う…」

「そうなの」

リーリンはにこやかな笑顔を浮かべて、片手に握ったままの包丁の側面を撫でながら続ける。

「で、何処に行ったと思う、レイフォン？」

「た、多分またお酒を飲みに行ったんだと思うよ。小柄だったけど大人の人だったし」

気が付けば、台所にはリーリンとレイフォンの二人きり。

リーリンに料理を覚えてもらっていた子供たちはいなくなり、レイフォンの体によじ登っていた子はスカートをはいてひるがえして、皆のいるリビングへと走り去るのがレイフォンの視界の端に映った。

「そう、そうなんだ……レイフォン暇ならそんなところに突っ立ってないで料理手伝って」

拒否権はなかった。

（なんか、何時ものリーリンとは違う）

秀困氣的に『いやだ』と、断れないものを纏っている。

先に逃げ出した子供たちのように、逃げ出したいレイフォンだが御飯抜きとかが一週間も続けば、そしてそんな時に汚染獣が襲ってきたら、レイフォンだって危ない。

「わ、わかった」

ドモリながらもレイフォンは手を洗い、リーリンの隣で料理を手伝い始める。

(ああ、恨むよ、兄さん…)

泣きたかった。

恥も外聞も捨てて泣き出したかったが、そんな事してもリーリンの冷やかな目線で見られるだけなのは目に見えている。

そんなもので見られることに耐えられないレイフォンは涙をグツと我慢する。

時偶、ツヴァイが女性と出かけるときには、大抵リーリンは今日のような雰囲気になる。

別に怒っているわけではないし、リーリンの言葉に大人しく従っていれば実害はないのだが、なんか嫌だ。

なんでリーリンがこんな状態になるのか、まだ子供な　いや、

例え十五歳になったとしても、鈍感なレイフォンには分かるわけではない。

（そういえば、笑って行為は本来的を威嚇するモノだって、兄さんがいつてたっけ…）

今日の食卓が、静かなものになる事を、レイフォンは予感していた。

レイフォンと別れ、Bar 深海魚へと赴き、そこでベロンベロンなカナリスに絡まれてから、三時間がたった。

俺の右側に座るカナリスは更に酒を飲み、もはや呂律が回っていない。

しかしそれでも日頃の鬱憤は晴れないのか、未だにアルシエイラに對しての愚痴を言っている。

「ピー歳の癖に、ピー歳の癖に、ピー歳の癖に……きいてますう、

ツヴァイさあん」

「ええ、これで二十回目くらいですよね、ソレ」

もう十五回くらい聞いて、数えるのは辞めた。

「そーなんですよ、あるしえいらさまは」

どうやら、俺の言葉は都合の良いように脳内変換したらしいカナリスは話し続ける。

氷の入ったブランデーを眺めながら聞き流す。

俺の力では、今のカナリスは止められない。

不意に、左手の袖が引つ張られ、左側を向く。

机に突っ伏しながら、ストローでウォッカを飲んでいるメリンさんが上目で俺を見上げていた。

こちらも随分と飲んでおり、酔っているのか、何時も白い肌がほんのりと赤く染まっている。

何時ものメリンさんを知っている人なら、思考を止め、見間違いと
思って自分の脳味噌の破壊を防ぐほどに扇情的というか、ギャップ
が凄いことになっている。

はつきりと言えば、可愛い……………酒臭くなければ、だが。

「ツヴァイ、ああ、ツヴァイ。なんでお前はツァンヴァレイ・アルモニスなんだ。というか、どうしたら糞女王の弟がこんな風に育つ」

何時も吐いている毒が、アルコールで中和でもされたのか何時になく素直な口調と甘ったるい口調で、何処かで聞いたことのある悲劇的戯曲の台詞を俺に囁く。

……………勘弁してくれ。

こんな世紀末を象徴するような混沌とした空間で酒を飲むことを、俺は望んじやいない。

今日一日良い事が続いた事に対する埋め合わせか何かの心算か、神様。

早く、早く来て欲しい。

そして、俺をこの地獄から解放してくれ。

劉を定期的に発散してSOSを送って、先程から俺の合図に気付き着てくれたキラキラ光る蝶々に、せつに祈る。

「ツヴァイさん、どーおもいますかあ」

カナリスが俺の右腕を抱き寄せ、ペタンコな胸で抱きしめる。

「ごめん、聞いてなかった」

急速に近づく馴染みの剽を感知し、話を聞きそびれていた。

「もーしかたないねえ」

何が可笑しいのか、ゲラゲラと笑い始めるカナリス。

「あの糞女、糞女王のことですよ。死ねばいいのに。死んで今まで私にしてきた仕打ちを償え。そして私をあゝの糞蟲の影武者させる」

なんか、笑った後にいきなりダークになった。

というか、メリンさんの口癖が移ったのか、カナリスの口がすごくぶる悪い。

「そうだ、あれを殺してツヴァイをアルモニス家当主にしよう。そして」

「そーですね。それいい案です、このクソチビ。そして私がツヴァ

伊さんのおねーちゃんになるです」

「へえ、中々愉快な話をしているね、君達」

殺到でこっそりと近づいてきたのか、その声は突然。

やべえ、剄を捉えてたはずなのに、気付かなかった。

ママさんも声でようやく気付けたのか、目を見開いている。

「なんですか、いまちようどすてきな未来予想図をえがいてるんですから、じゃまするなです。ころすぞ、このウジムシ

…」

「私たちにかかると、痛い目みるぞ ……」

酔っ払い、判断とか色々なモノが鈍っていた二人は、話しかけてきた人物に毒を吐く。

振り返りながら言っつて、固まる。

「どうしたんだい。もっと続けたまえ」

振り返って言葉が途切れた二人に、平静を装って言う。

額には、確りと青筋を浮かべ、口は笑みで吊り上げり、目は全然笑っていない、我が姉。

怒りを抑えるためなのか、アルシエイラは未だに殺戮を維持したままだ。

解除したが最後、燃え滾る怒りを腹の底に止める事が出来ない、といった様子。

「さあ、続けたまえ、カナリス・エアリフォス・リヴィンにバーメルン・スワツティス・ノルネ。でない」と

何時ものふざけた言葉遣いではなく、女王として民衆に演説する時に使う口調が、落ち着きすぎててこええ。

「それが君達の最後の言葉となるよ?」

恐怖で一気にアルコールの抜けた二人は、アルシエイラの様子に、酔っ払って自分達の言った言葉を思い出し、体を小刻みに振るわせ始めた。

「ぐ、グレンダンの女王がなんぼのもんですか!」

「こ、こちらら天下のクソ天剣授受者だ。このクソ蟲女郎」

カウンター席の椅子を蹴飛ばし立ち上がり、天剣に手を掛ける二人。しかし、やはりと言っべきか、根源的な恐怖に天剣を握る手が震えている。

「ちょっと、店内での喧嘩はご法度よ。やるなら店の外、十キロ四方出てからにしてよね」

溜息混じりに慣れたように言いながら、グラスを磨くママさん。

「大丈夫。これから始まるのは、一方的な断罪だから」

言うが早いか、アルシエイラの右手がぶれる。

それと同時にメリンさんの姿が掻き消え、入り口で破壊音。

Bar 深海魚のドアがぶち壊れており、店の外の道路にメリンさんの転がる姿。

「ひい …」

余りにも一瞬の暴力に顔を青ざめる。

引き攣った悲鳴をカナリスは上げるが、途中で掻き消え、メリンさんと同じ末路を辿る。

…今度は見えた。

活剱で動体視力を限界まで引き上げ、見えたそれは、ただの平手。

いや、ただと言っていていいのか分からない。

活剱で強化した掌に、インパクトの瞬間に剱の放出があったから、部類としては活剱衝剱混合変化か。

それともそれぞれの剱が個別で動いていたから、ただの衝剱と活剱を別々に使用しただけなのか。

どちらにしろ、ただの平手にしては無駄に高度なものだ。

「あーあ、随分と派手にやってくれちゃって。扉、弁償してよね」

「天剣とかからお金ボツタクっている癖に、随分とケチなこと言うわね」

「オカマには金がないのよ。取っちゃったからね」

「…分かったわ。明日にでも王宮に請求書出しといて。それでいいでしょ？」

「まあ、ね」

何と言うか、自分の店の中でこんなことされても、普通に会話できるママさんがスゲー。

「それじゃあ、ツヴァイ。今日はもう帰りなさい。私はこれから忙しいし、この二人も忙しい。
一人でお酒飲んでも楽しくないでしょ？」

ニッコリと微笑みながら、路地に転がった二人の襟首を掴み引きずって、店まで戻ってきた。

二人とも気絶こそしていないようだが、全身が動かないらしい。

必死に体を動かそうとしているが、反応しないらしい。

焦りが顔にありありと浮かんでいる。

「……………ツヴァイ」

絶望というものをこれでもか、というほど含んだ声でメリンさんが俺の名前を呼ぶ。

「…なんですか、メリンさん」

姉を止める事が出来ない、というか呼んだ張本人である俺はただ聞くことしか出来ない。

「花、ありがとう。うれしかった。

それと今までお前と一緒に居た時間は、そこそこ楽し

」

鬼だ。

アルシェイラはメリンさんがまだ俺に話している途中だということにも関わらず、店を飛び出していった。

そして、そのまま家の屋根から屋根へと飛び移り、王宮に向かって消えていく。

壮絶な死亡フラグを残して行ったな、メリンさん。

キラキラと光る蝶々が、俺の目の前にやってくる。

『あらあら、大変なことになってしまいましたね、二人とも』

蝶々から、女性の声が発せられる。

『自業自得と言えば、そうなんですよけれど』

この蝶こそ、俺がアルシエイラに連絡を取るために頼ったものだ。

俺が酔っ払いに絡まれて二進も三進もいかなかった時に、定期的に剋を発して様子を見に来てもらい、アルシエイラにSOSを送ってもらったのだ。

「刀自、助かりました」

俺は蝶々に向かって言う。

一般人が傍から見れば、頭の可笑しい人が蝶々と会話しているように見えるのだろう。

しかし、この蝶は本物ではない。

というか、青白く光る蝶が実在するなら一度見てみたい。

これは武芸者の中でも取り分け特殊な能力者、念威操者の放つ念威端子だ。

剋とは少し異なった念威を操り、辺りの探索などをこなし、念威操者の目となり耳となり、鼻となる。

完全に生まれてきた時の資質に依存する念威という力は、普通の武芸者 いや、念威操者以外の人間以外、扱うことが出来ない。

故に、武芸者は念威操者になることは叶わず、そして念威操者は念威操者以外になることは叶わない。

そのことは、この身で確りと学ばせてもらったのは、他でもない、この方　天劍授受者、デルボネ・キュアンティス・ミューラ。

かなりの高齢で意識の無いまま寝たきりである状態だが、その念威は衰えることもなく、グレンダンの目として働き続けている。

八十年以上天劍の座に座り続けており、刀自が死ぬその時まで、その席は揺るがないだろうと言われている。

確かに、レギオス進行先一週間後の地点を観測出来る時点で既に化け物だ。

しかもおまけに念威では把握し辛い地中の中さえ把握しているのだから、その化け物具合は折り紙付き、といったところだ。

しかしその実、気さくで気の良いお婆ちゃんでもある。

先日の汚染獣襲撃時、俺に端子を飛ばして連絡してくれたのもこの人。

『それにしてもバーメリンさんは、少し見ない間に良い人でも出来たんでしょうね。』

随分と乙女な顔になっていましたし、最後に貴方に向けた言葉など、何処かの悲劇的な戯曲のヒロインそのままでしたね。

あれだけ沢山の良い人を紹介しても見向きもしなかったのに…一体誰のおかげなんでしょうか』

言外に貴方の所為ですよね、と言われているのが分かる。

ついでに言えば、責任取りなさいよ、とも。

実はこの人、気のいいお婆ちゃんでは飽き足らず、気に入った人に対してお見合いをさせる事が趣味らしい。

全く持って、随分とお節介焼きだ。

近い将来天剣の仲間入りするレイフォンの為に、絶対お見合いリストを制作するぞ、この人。

『ツヴァイさん…』

「はい、刀自」

『聡明な　　鈍感ではない貴方は気付いているのでしょうか？　彼女、いえ、彼女達の想いに』　　彼

「まあ、超絶的な鈍感とかでもない限り、気付きますよ、普通」

よく、俺に愚痴を零すカナリス。

俺とだけは、まともな人付き合いをするメリンさん。

普通に考えて友人以上のものと考えるのは、可笑しいことじゃあない。

それに酔っ払っている時の会話だって、それを証明している。

『なら』

「でも、俺はツアンヴァレイ・アルモニスなんです。三王家が一つ、アルモニス家の長男。

もう、色々と諦めてますし、覚悟も決まっていますから」

『…それは』

「小さい時から思っていましたよ。”仕方ない”じゃありません。義務だとも、思っていないません。

ただ、強いくせにだらしなくて、そして少し寂しそうな姉の為に、自分自身の為に。

だから俺は力を求めて、姉であり女王であるアルシエイラでは出来ない事と、戦えない敵と、戦うと誓ったんです」

『それは一体誰に？』

「自分自身に。 ああ、これ、姉には内緒でお願いしますね」

『分かりました。 このことは私の胸に止めておきましょう』

「そうしてください」

『しかしそれなら、そういうことも考えて選んでおいて良かったですね』

「なにがですか？」

ママさんに会計を頼み、あんまりなボツタクリ具合に魂が昇天しかけ、ドアの弁償代と一緒に王宮に請求してもらおうことにして復帰。

自刀の言葉が頭から耳へと通り過ぎる。

『貴方の婚約者のことですよ、ツヴァイさん』

この時、普通にこの言葉をスルーしていた。

後になって、この時にもっと確り聞いておけばよかった、と思うのだが、その時になっては既に後の祭りだった。

06 (前書き)

お年玉

もはやもらえないお年玉、落とします。

ズンツと腹の奥に響く音。

同時に揺れるグレンダン。

地震、ではない。

この世界のプレートが、一体どのように組み合わさっているのかは知らないが、単純なプレートの跳ねっ返りからなる地震を、この世界の住人は知らない。

これは都震。

正当な地震というものが存在しているか怪しいこの世界において、唯一足場が上下に揺れる現象。

都震には種類が二つある。

一つは移動型都市であるレギオスが、足場の悪い場所を移動中に踏み外した時に起こる。

これは単に滑ったり足場が崩れただけなので、損傷や移動不能にならないければ基本的に放っておいても構わない、取るに足らない減少で片付く。

そしてもう一つ。

地下に巣くう汚染獣の巣に、レギオスの足が突っ込んだ場合に起こる。

都市にとっては、これは致命的な危機だ。

巣穴から這い出てくる汚染獣に対応しなければいけなくなる。

対応しないと汚染獣が都市を蹂躪するから。

街灯と一緒に設置されているランプが赤色を振り回しながら、緊急事態を告げる。

けたたましいサイレンの音がグレンダンに鳴り響いていた。

一般人に部類される住人たちは、汚染獣の襲来を告げる警報に、落ち着いて地下シェルターに避難していく。

まるでピクニックにでも行くようにハシヤグ子供さえいる。

誰もがこの危機に対して悲壮感を持ってはいなかった。

それはここが狂った都市だから。

もはや月一のイベントのように汚染獣と遭遇しているのだ。

ほかの都市が数年単位でしか汚染獣と遭遇しないことを知っていれば、グレンダンが狂っていると思われるも仕方がないことだ。

しかし住人たちはそうは思わない。

この都市に生まれ落ちてから、これが日常であるがために、この異常を異常と認知していない。

それどころか、この都市を一番安全とさえ思っている者さえいる。

だから今回の地震も、ここグレンダンにおいて日常以上の何物でもなく、長くても数週間ほど地下シェルターに閉じこもっていれば済むだけのものでしかなかった。

……一般人にとっては。

俺たち武芸者は、一般人と異なり三日前に汚染獣襲来の通達が入り、体調を整えて招集されていた。

三日前に汚染獣の接近などが知らされるなど、これはほかの都市からしたらあり得ないことだろう。

しかし狂った都市グレンダンにおいて、情報戦というものは頭一つ飛びぬけている。

今回の敵情報さえすでに出回っていた。

幼生体：約五千匹

雄性体：十五匹

雌性体：三匹

今回は少ない方だというのが、武芸者たちの認識だった。

幼生体一万匹以上に取り囲まれた一年前や、五十匹の雄性体との闘いに比べれば、確かに少ない。

そんな情報を見ながら、俺は欠伸を噛み殺す。

ねみい。

レイフォンの勉強に付き合っ、三徹したからなあ。

もう一度欠伸を噛み殺す。

都市の外。

目の前には廃退した荒野が広がっている。

汚染物質に焼かれない為に、防護服を着ているから風を感じられないのが残念で仕方ない。

それに眠気を抑えるのにコーヒーも飲めやしない。

いや、三徹した俺が悪いんだけどさ。

「眠たいんですか、隊長？」

「ああ、三徹」

隣に並ぶように立っていた副隊長に欠伸を噛み殺したのを見られた

か。

王族編成 第一中隊。

十六人からなる王族の血筋の武芸者が所属している隊で、俺がその隊長。

「小規模とはいえ、油断はできませんよ。ここは都市外なんですから」

汚染物質の充満した都市外。

防護服で完全に防げるが、それはそれが万全の状態にあればの話だ。戦闘中に少しでも破けてしまえば……破けた場所から汚染物質が入り込み、肌を焼き、内臓を腐らせる。

掠り傷一つでそうなってしまうのだ。

ベテランであろうとも、一つの油断が命取りになる。

誰もが汚染獣との戦いには最大の注意を払い、神経をとがらせる。

俺くらいのもんだろうよ、こんな場所でのんびり欠伸を噛み殺して
る奴なんて。

「今回は出撃せずにこのままここで指揮を取られてはいいかがですか

「？」

「いや、指揮はお前がしろ、副隊長。俺は今回ベルの初陣の後見役だ。現場指揮まで出来るか」

「ではお気をつけを。今回のプランでは私たちが先鋒ですので」

優秀な副隊長は心配性で困る。

「まあ、戦闘に入れば眠気も吹き飛ぶだろうよ。それよりベルの様子を見てくる」

「はい。初陣の時は私も緊張しましたからね。クラリーベル様は私の時よりも幼い。何かあれば私もフォローします」

「ああ」

ロンスマイア家の家紋が付いた防護服を探す。

この舞台上でロンスマイヤの家紋が許されているのはベル一人だからな。

見つけやすい。

見るからに緊張してますというように身体を強張らせているベルを見つける。

作戦概要を告げられ、簡単な確認作業も終わってしまった中、初めての汚染獣戦ということで手持ち無沙汰になっていた。

剣帯に収めてある錬金鋼や防護服の確認などを何度も何度も繰り返して、出撃の合図を待っていた。

「ベル」

「……お兄様」

振り返り、俺を見るベル。

「緊張してるな。まあ、今回は小規模だ。気楽にいけばいい」

「はい。そうですが やっぱり少し不安です」

「実力的に汚染獣と戦っても大丈夫だと皆が認めたんだけ信じる、自分の実力を。」

それでも不安なら、お前を鍛えた俺を信じる。」

「お兄様 はい。お兄様を信じます」

フルフェイスヘルメットを被っていて表情は見えないが、雰囲気は落ち着いたのを感じる。

これなら大丈夫、か。

「ならよし。さて初陣だ、気張っていけ」

「はい！」

念威端子がこちらに舞い込む。

『汚染獣が動きました。第一中隊は迎撃態勢を整えてください』

念威端子越しに感情を排した声色で伝令がきた。

「了解つと。ベル、行くぞ」

「はい」

のんびりと歩きながら、ふと思う。

こいつはちゃんと都市外戦での戦い方を知っているのか？

「ベル、対汚染獣戦での鉄則、言ってみろ」

「えっと、まずここはエアフィルター内ではないので、この防護服

が破れないように気を使い、汚染獣の攻撃を受けないようにする」と

ちゃんと知ってたか。

「正解。これが俺達の生命線だ。これが破れれば俺らの身は汚染物質によって焼かれ、数十分後には死に至る。

それさえ覚え、気をつければ取るに足らん相手だ、雄性体や幼生体なんぞな」

俺達の相手は何時も、この汚染物質でしかない。

これの所為で、全力で戦えない者が一体何人いることが。

「まあ、気楽にいけ。お前なら何てことない相手だよ、ベル」

「はい、お兄様」

そう言っただけの頭を撫でて緊張を解してやる。

ベルも余裕が出てきたのか微笑み、自身の鍊金鋼を握り直す。

『幼生体、数五十。接近してきます』

念威端子を通して、念威操者の報告が入る。

見れば砂煙を巻き上げて此方へと向かってくる一群が確認できた。

「此方も確認した。これより一番隊は迎撃に入る。逐一汚染獣の報告を頼む」

『分かりました。御武運を』

「さて、聞いての通りだ。第一小隊、第二小隊は迎撃準備。第三、第四は先制で衝剄を放つ。確り引きつけてから殺せよ」

念威端子にそう言い、一番隊全員に呼びかける。

それに各々の言葉で答え、錬金鋼に剄を流し込み始める。

地鳴りのような足音をたて、汚染獣が百メートル先に見え始めた。

「撃て　　！！」

副官の号令とともに衝剄が放たれ、汚染獣の数を減らしていく。

そして衝剄により立った砂埃の中へと、第一、第二小隊が閃剄で切り込んでいく。

『雄性体、突っ込んできます』

つい先程まで、上空を旋回して獲物を探していた雄性体の一匹が、痺れを切らしたのか好機とみたのか、こっちに來たらしい。

「俺が往く！ 貴様等はここを抜かれるなよ！！」

そう怒鳴り、俺は脚に剄を集め跳躍。

地面の陥没する音が後になり聞こえる。

風斬り音が鼓膜を打ち、景色が流れる。

一瞬で六十メートル程上がり、徐々にスピードが遅くなってくる。

「レストレーション」

剣帯の中にある新作を掴み取り、復元させる。

顕現するのは無骨な石剣。

巨大な石を削り取って造りだしたかのような、荒々しく原始的な見た目。

二メートル三十センチほど、重さは見た目どおりの超重量。

それを一振り、身体を回転させ、向かってくる雄性体へと叩き揉む。

内外混合剄

剄を全身に廻しバランスをとり、斬撃が化鍊剄に等しい変化を見せ、雄性体の身体を九の斬撃が走った。

四散した雄性体はまるで、出来損ないの花火のように緑色の体液をばら撒きながら、俺と一緒に落下していき、地面に濁った緑色の花を咲かせた。

『五番隊突破されました。このまま一番隊へと数百の幼生体が向かってきます』

念威操者の焦りの声を聞きながら、俺は指示を出す。

「全隊迎撃体勢。まあ、のんびりと往こう」

狙撃手を除いた全員が武器を構え、前へと出る。

もちろんンベルもその中に居る。

「詰まらん相手に死ぬなよ、祭りは随分と先なんだからな！」

そう言つて先陣を切る。

雪崩れ込んで来た幼生体を糞重い石剣で薙ぎ倒し、吹き飛ばされた幼生体の死骸は、突進してきたほかの幼生体を巻き込んで倒れる。

石剣を待機状態に戻し、両手に長さの違う刀を復元させる。

斬る事に特化した刃で、柔らかい甲殻を切り裂き、血飛沫を浴びながら、殺していく。

乱戦に次ぐ乱戦。

味方と汚染獣が入り乱れ、大技は出せない。

新入りや年の若い奴等の経験の場として、一人で一掃する訳にもいけないから、端から出す心算は無いが。

「くそっ！」

何処からともなく聞こえてきた悪態。

その発生源を見れば幼生体に群がられる武芸者。

俺は新作の剣を復元させ、一振りで十五匹の幼生体を屠る。

「あ、有り難うございます」

「全体を見て戦えよ。汚染獣と味方の位置取りに気をつける」

「はい！」

元気良く返事を返した武芸者はそのまま、突撃を掛けてきた幼生体の群れへと突っ込んでいった。

しかしこれでは埒が空かない。

近場の汚染獣も集まり出しているのか、念威端子越しに聞こえてくる報告によると、他の戦場も随分と梃子摺っているようだ。

ここは一気に王手を掛けに行くか。

「副隊長！　ここの指揮は任せるぞ」

「はい！」

一匹の雄性体の相手をしていた副隊長が、羽を切り裂きながらこちらを振り向き返事を返した。

何時ものことなので慣れた様子に、安心して任せられる。

行きの駄賃だ。

幼生体の発生源であり、母体である雌成体への道のり。

それを遮る奴等を殺していこう。

悠然と歩き、近づいてくる幼生体には刃を振り、黙らせる。

目の前には第四小隊の面々。

ベルを所属させた小隊だ。

幼生体に取り囲まれながらも奮闘している。

と、ベルが正面、側面の三方向の幼生体六匹に気を取られている隙に、背後から幼生体が襲い掛かる。

「っ!？」

影で気付いたのか振り返り、身体を硬くするベル。

俺は仕方なしに一度剣を振るい、ベルが梃子摺っていた六匹と、襲い掛かっていた一匹の計七匹を両断する。

「一度定めば命取りになる。常に動き続ける、止まれば死ぬぞ」

「は、はい。ありがとうございます、お兄様」

緑色の血化粧で顔を染めたベルが、律儀にお辞儀をしてくるのを苦笑いで受け止める。

知覚領域で感知し、第四小隊が相手している幼生体を新作の両刃洋剣を一振りで屠る。

「第四小隊は俺と共に来い。何時も通りに往く」

はい、と返事が四方から返ってくる。

「ベル、お前も付いて来い。いい経験になるぞ」

「何処に行かれるのですか、お兄様？」

「いや、なに。雌成体どもを叩きに行くだけだ」

「けれど念威操者たちは未だに雌成体の位置を把握してはいませんが？」

「大まかな位置なら俺が分かる。後は奴等らがルートを割り出して俺らが殺す。それで十分だろ？」

王族専用の防護服の裾を翻し、俺は先頭に立つ。

知覚領域の反応では、地上に雌成体はいない。

詰まる所、地下にいるということだ。

案の定、地表へと染み込んだ知覚領域が、雌成体を感知した。

おおよその位置を把握した俺は、伸ばしに伸ばした知覚領域を一時的に解除。

半径10キロに及ぶ知覚領域を維持するには、ドバドバと湯水を使う如く剷を使う。

如何に膨大な剷を持つ俺でも、疲れるものは疲れる。

レイフォンの勉強会で三日不眠不休で勉強を教えていた身としては尚更だ。

複数の念移操者に指示を出し、大まかな位置から正確な位置へと特定されていく。

「お前等は、個々で雌成体にぶつかれ。きっちり仕留めろよ。ベ
ルはこのまま俺について来い」

そうして解散。

各々に割り当てられた雌性体へと向かっていく。

「行くぞ、ベル」

「はい、お兄様」

緊張の為か、言葉数少なく返してくるベル。

それに微笑ましいものを感じながら、俺とベルは指定された道を通り、指定された地表の割れ目へと飛び込み、指定された分かれ道を進む。

そうしてた取り付いたのは戦闘をするには些か狭い洞窟内。

目の前にはお産という人生の一仕事を終えた雌性体が横たわっていた。

疲れてはいるだろうが、それでもまだ戦える。

十二分に人も、鍛錬不足な武芸者も、少し油断した武芸者でも、殺せる。

「五分」

「はい」

ただの呟き。

それだけで済まされてしまいそんな指示に、ベルは応えた。

剉を鍊金鋼に込め、駆ける。

俺達の存在に、いや己に向かってくるベルに気付いた雌性体が、咆哮を上げて迎え撃つ。

お産の為に詠えたのであろう、さほど広くない洞窟内。

一秒にお釣りが若干残る程度に辿り着き、一撃目を振り下ろす。

「っ
「!」

予想よりも硬い。

表情が、念威端子越しに聞こえた吐息がそれを物語った。

確かに幼性体と比べれば劇的なまでに雌性体の皮膚は硬い。

それを知識として知ってはいたただろうが、実際に斬り結んでみるとその違いに驚かされた、といったところ。

そしてお返しとばかりに雌性体が、その前足を振るう。

ベルは体を捻り、器用に空中回転。

自らの死を回避し、ついでとばかりに閃斬を放つ。

放つが、威力が押さえつけられたソレでは、雌性体の皮膚は斬り裂

けても肉と骨を両断するまでにはいかない。

ベルは

五分だけ、お前がアレの相手をしろ。

その意味を十二分に理解していた。

別に自分が雌性体を倒す必要がないと。

いや、この条件下において、自分に倒す方法がない、ということ。

ベル自身、アレを倒すだけの剋技と剋の量を持ち合わせている。

持ち合わせてはいるが、それを放って、この脆くて狭い洞窟を倒壊させない自信がないのだ。

だからこそ、時間稼ぎしかする事がないし、俺の為に五分を稼ぐ。

妥当な回答。

我が敬愛すべき姉君ならば模範生過ぎてつまらない、と応えるだろうが……

天剣達ならば、崩落する天井のことなど気にもしないで、寧ろ打ち抜く勢いで汚染獣を殲滅するだろう。

しかし対峙しているのはベル自身。

対汚染獣戦の鉄則であるヒット・アンド・アウェイを選び、一気に

距離を詰め、同様に一気に間合いを開ける。

決め手に欠けるベルが段々と劣勢に立たされていく。

幾ら攻撃すれども、剄の練りの甘い小技では、幼いベルの力で甲殻を切り裂くには至らない。

大技を出せばそれでケリがつくだろうが、そうすればその後のことに対処出来ない。

中途半端すぎるが故の苦惱といったところか。

頭が回るからこそ、そんなことで躊躇する。

それが焦りを生み出して、焦りが疲れを呼び起こし、致命的な隙を作り出す。

思ったとおりの展開。

未だに致命傷も掠り傷も、もらっていないベルだが、時間の問題だ。

だからこそ。

だからこそ設けた、五分という制限。

いや、救済か。

それぐらいなら、問題なく戦えると踏んでのベルに与えた戦闘機会。

初陣だからといって対峙して、戦わせなければ意味がない。

優しく丁寧に、育ててきた、造り上げてきたベルを、こんなつまらない雑魚相手に無くすには惜しいから。

さて、それじゃあ仕舞いにしよう。

閃斬で負った傷に怒り心頭なのか、雌性体が咆哮を上げて襲い掛かってくる。

「仕舞いだって」

無骨な石剣を復元し、構える。

ベルが稼いだ一分間で剽は十分に錬れている。

故にこれから出すこの技は必殺。

文字通り、必ず殺す。

【内外混合剽　射殺す百頭】

九の線が雌性体に奔る。

異常性があるとすれば、その全てが全くの同時に雌性体を刻んだこと。

そして刻んだ瞬間に、石剣は剄の奔流に耐え切れず、溶解してしま
った。

「 つ、お兄様！」

射殺す百頭の余波で崩れ、降り注いできた瓦礫を見て、ベルが叫ぶ。
そんなに叫ばずとも聞こえているし、三王家の末席に座る者が、た
かが土塊ごときで焦るな。

【外力系衝剄 閃斬】

一切の手加減なし。

降り注いでくる岩へと向け放ち、天井に大穴を開ける。

ベルを肩に担ぎ、降り注ぐ岩を足場に地表へと飛び上がる。

邪魔な岩は新たに復元した剣で砕き、そのまま地表へ。

薄雲に覆われた、濁った空が瞳に映る。

そして風切り音。

その中に自分達ではないものも混じっていた。

雄性体。

地表から飛び出してきたご馳走に、飛びついてきたのだろう。

ついでに空気の読めない念移操者からの通信。

剣を一振りし、俺の剣の間合いの外から切り刻む。

青緑色の血を撒き散らして雄性体は堕ちていく。

俺達は重力に従い上昇を止め、落下していく。

身体を一回転させ、体制を整え雄性体から離れて

着地。

着地時にグフッ、という声が聞こえたが気にしない方向でいく。

しかし中々使えるな、この新作は。

上々、上々。

しかも他の奴等も皆、雌性体を倒したとの事。

刀自身が言っていた数と一致する。

いやはや、中々に上々な出来だ。

しかし、しかしだ。

幼生体の発生は止まったが、それでも数が多すぎる。

「まあ、ここまでか」

これ以上こんなチマチマした戦闘を繰り返しては日が暮れる。

なによりレイフォンの所為で眠たい。

新人や雑魚武者には悪いがここら辺で幕引きとしよう。

俺が考えた対多数の最高峰／ハイエンド。

最終的結論／ファイナルアンサーではないが、今現在の俺に出来る究極の答え方。

雑魚相手にしか使えないが、群がるのは大概雑魚だけなので、これで十分。

戦闘前から別口で練り出していた剄を開放。

掌にバスケットボール大の剄の塊が出現。

頭上数千メートル先まで上昇させ、停滞。

知覚領域を一気に引き伸ばし、全ての戦闘領域を覆い尽くす。

「爆ぜろ」

【外力系衝剽 化鍊剽変化 山嵐】

俺の言葉を発動キ―とし、上空に上がっていた剽弾が膨らみ、膨らみ続けて半径九十メートルまで膨張し、破裂。

五センチ程度の小さな剽弾へと無数に分裂し、知覚領域で確認している幼生体、雄性体へと向かって飛翔。

霰のように地表に降り立つ剽弾は的確に汚染獣へと吸い込まれた。

「ただいま」

「おかえりー、ツヴァイ」

珍しく書類仕事でもしていたのか、何時も元気なアルシエイラがソファーにだらしなくもたれ掛かっている。

俺も疲れていたので、だらしない姉の横に座り込む。

流石は王族の座るソファーだけあって、柔らか過ぎず、硬過ぎずと無駄に高級感溢れる座り心地。

姉弟揃ってだらしなくソファーに座り込む光景は、カナリスが見たら溜息の一つは吐くに違いない。

注意をしないと予想するのは、既にこの姉を矯正することを諦めているだろうから。

「で、カナリスを伝言にしてまで呼び出しといて、今日は何の用ですか？」

「んー、ちょっとね。今度ある天剣決める大会に出てもらおうかと思っただけ」

だらしなく伸びた声で、とんでもない事を言ってくれる我が麗しの姉。

…もうヤダ、この人。

「…無理なんじゃないの？ 普通ソレの本戦に出るには、そこら辺の大会とかの成績優秀者とか、汚染獣戦に多く出ている人達でしょう？」

いくら女王の権限を使ったとしても …いや、女王の権限を使うからこそ、不満が出る。

誰とは言わないが、猛抗議してくる奴に一人、心当たりがある。

権力があっても中々自分の為に使うことなんて出来やしない。

例えばレイフォンたちの孤児院に多額の援助金を出したり、食料を提供したりすれば、他の孤児院にも同等の施しをしなければ民衆の不満が募る。

それに年がら年中汚染獣と戦争しているグレンダンの国財は、同系の都市と比べれば驚くほど低いらしい。

だから俺に出来ることといえば、お土産と称して王宮からくすねた壺や銅像を孤児院の玄関にそつと飾つとくくらしいものだ。

ああ、そういうえばこのまえ置いといた壺にリーリンが花を活けてたっけ。

……時価数千万の高級品の壺に。

知らぬが仏ってえのは、こういう事を言うのかもしれない。

「や、大丈夫でしょ。汚染獣戦ではツヴァイが誰より活躍してるし、それにちよくちよく大きな大会に出てたでしょ？」

ああ、時偶強制参加させられてたのって、そういう意図があったのか。

賭け試合との合間にやっていたんだが、全く知らなかった。

「ところでツヴァイ、なんか汗臭くない？」

俺の臭いが気になるのか、アルシェイラが俺に寄りかかり、胸元に鼻を押し当ててる。

「そう言う姉様は、いい匂いがするな」

モフっと艶のある黒髪に顔を埋めれば、どことなくフローラルでゴウジャスな香りがしてくる。

「女の子ですから」

べたべたと二人して抱き合っているとアルシェイラが気になる発言

をした。

おんなのこ？

実際の年齢はこの際置いておくとして、外見年齢的に女の子お？

ぴくっ

思っている事が分かったのか、俺の下にいる姉がピクッと反応する。

俺は急いで違う事を考え誤魔化し、様子を伺う。

「……………ところで、汗臭いのはなんで？」

「ああ、さっきまで汚染獣と戦っていたから。それに試してみたかったこともあったし、慣れない事をして無駄に疲れた」

やっぱりアレは無駄に剋を喰うような気がする。

具現段階でもそうだし、維持するのも中々に大変だった。

発想自体はパクリで、結果は次第点なんだが…

まあ、切り札の一つとして数えても大丈夫か。

「そう。それならお風呂に入りましょうか」

「ん」

アルシェイラが体を起こそうとしたので、体を退けてやる。

「さあ、行きましょう」

先程のタレパンダ振りは何処へやら。

早く早くと俺の手を引っ張る。

「え、また一緒？」

結果は見えているが、一応言ってみる。

「だってツヴァイ、呼び出したり、用事がなかったら全然帰ってこないしい」

用事がなくても月に一度は必ず帰ってるんだけどな。

どうやらそれでは姉にとっては全然少ないらしい。

というか、『しい』じゃない。

俺は今年で十五歳になったばかりだし、中身の年齢では中年とまではいかないがいい歳だ。

グラマラスなボディをお持ちな姉と一緒に風呂に入るのは中々辛い。主に若返ってしまった俺の息子がね、中々キカン坊で困りものだ。

これで血が繋がった姉弟ではなく、『義』とかが姉弟の前に付くのなら、押し倒したりするんだがな。

残念ながら、そんな都合の良い事実を俺は知らない。

なのでアルシエイラと風呂に入る時は、何時も生殺しの様な状態だ。そんな俺のことなどお構い無しに、活剏で高められた怪力に、抵抗むなしく脱衣所まで連れて行かれる俺。

「ちよ、入るから、一緒に入らせていただきますから！　せめて服くらい、ああ　ズボン、いやトランクスだけでも自分で脱がせて！？」

06 (後書き)

感想は朝市の活動源になります。

きびしい意見や優しい意見など色々と求めていますので、お暇な方は書いていただけるとありがたいです。

07 (前書き)

お年玉もらった！

蒼く晴れ渡る空。

まさに蒼天と言つに相応しい空模様。

そんな空にカーニバルとかで打ち上げられる、ただ色の付いた綺麗じゃない花火が断続的に打ち上げられている。

闘技場は一番広く、一番頑丈で、一番煌びやかな、そして数々の天剣授受者の誕生を見てきた場所。

観客席は全てが埋まっており、異常なまでの盛り上がりを見せている。

闘技場に納まりきらぬ観客達は闘技場近くに設置されている巨大スクリーンで実況中継を見ているか、それとも酒場などにある小型モニターで酒を煽りながら決戦を今か今かと心待ちにしていた。

商売根性逞しい人達は、出店としてアルコールやジュース、ポップコーンやホットドックを売り歩いている。

会場内に蒼光る蝶々状の念異端子が飛び交い、声が端子を通じて響き渡る。

「私が、このグレンダンの女王の座に就いた時、十二本あるはずだった天剣は欠けに欠け、たったの六振りしかなかった。」

しかし、ついに今日。 長らく空席だった最後の一本、十二番目の天剣。 ヴォルフシュテインが生まれる』

神々しいまでのカリスマを乗せ、アルシェイラの声が念威端子を通して民の心を釘付けにする。

熱狂的な雄叫びを上げていた者も、バイトの物売りも、泣き声を上げていた赤子も、全ての民が声を上げる事を忘れ、ただ黙って耳を傾ける。

『今日はグレンダンにおいて、最良の日となるだろう。 十二本の天剣の担い手達が揃い、グレンダンの在るべき姿へと、ようやく戻るのだから。

初代グレンダン王も、草葉の陰でこの日が来る事を心待ちにしていたに違いない。

さあ、皆で祝おうではないか、ついにこの日が来たことを。 そして見届けよ、天剣を持ちし資格のある者たちが天剣に手を伸ばす様を。 女王アルシェイラ・アルモニスの名において宣言する。 今、ここに天剣授受者選定式を開始する』

外行き様の口調と雰囲気を纏わせた姉が、高らかに宣言すると、女王の雰囲気に飲まれていた民衆が歓声を上げる。

選定者である俺たちは、纏めて選手一同を収容している控え室のモニターで女王の演説を聞き、建物自体が震えるような歓声を肌で感じていた。

大会の形式は至極単純。

トーナメント方式での勝ち抜き戦。

ルールは何でもありだが、相手を降伏させるか、レフリーストップ、気絶させる、または殺せば勝ち。

もう既に第一試合に出る者は控え室から出て、闘技場へと上がって行った。

さあて、ここからが始まりだ。

全員で十六人の武者たち。

当然実力的にはグレンダン屈指の者達だ。

まあ、天剣授受者に相応しい者など、片手で数えても指が二本余る。

ルッケンスの門弟は論外だ。

それにミッドノットのも、リヴァネス家次女や師範大も駄目だな。

全員が全員、師範代クラスなのは間違いないがそれだけ。

劉の量の凡夫のものでしかないし、第一に致命的に欠けているモノがある。

それ故に天剣には相応しくないし、天剣へ触れることさえ出来ないだろう。

実力。

その一点においてのみに絞れば、いや、天剣を得るにはそれだけが重要だったな確か。

それだけの観点で見れば三人だけ、ここにいる。

俺と、レイフォンと、そして賭け試合で戦った事のある同年代の女一人。

眩しい陽射しに目を細めながら、中央へ寄って行けば見覚えのある顔。

ガハルド・バレーン。

ルツケンスの師範代。

軽く、一捻りしますか。

『Re:write』

第一章：ビギニング・セカンドライフ（07）

今、何度目かの観客の大音量の音が室内に響く。

選定戦も午後となり、残すことあと二試合に減った。

闘技場にいるレイフォンは恐らく勝ったのだろう。

いや、そもそもリヴァネスの次女に手古摺る様なレイフォンではない。

証拠に剽の量がほとんど減少していないのが、ここからでも感じ取れる。

残ったのは俺の準決勝と、決勝の二試合。

俺と賭け試合で戦ったことのある女との対戦と、その勝者対レイフオン。

その二試合。

控室に念威端子のアナウンスが響く。

俺はアナウンスに従い、ドアを開ける。

いよいよだ。

そう思い、廊下へと出るとバツタリと女と出会う。

が、互いに言葉が見つからない。

次の試合の対戦相手ということもあるし、仲良く話すような間柄でもない。

俺はこの女とは賭け試合ではない何処かで会ったことがあったような気がするのだが……

俺と女は肩を並べ、二人して闘技場へと続く廊下を歩いていく。

今日だけでも何往復もした道程であるが故に、足取りに迷いもない。

闘技場への入り口が近くなるにつれて、観客の興奮した声が徐々に大きくなり始める。

互いに始めからの沈黙を惰性のごとく守っていたのだが、闘技場の入り口で、声をかけられた。

「今日は、勝たせてもらおうぞ」

凜とした声。

声だけこちらに向け、首どころか視線さえ動かさずに前に固定したまま、言われた。

俺は闘技場に降り注ぐ日光に眼を細めながら、答える。

「前は結構ギリギリだったからね。けど、前回の俺の全力だと思っっているのか」

女は初めて俺を見て、口の端を吊り上げる。

「全力でなかったのが貴様だけだとも思っているのか？今回が最後の機会故に、貴様には私の全力を見せてやろう」

もはや、闘技場で錬金鋼での戦いが始まる前から戦いは始まっていた。

子供の口喧嘩レベルの言い合いでしかないが、やたらと突っかかってくるので、それに応じる形で対応していたら、引くに引けなくなってしまうた。

「貴様に天剣は相応しくない」

「お前ほどじゃないよ」

中央へとより、念威端子が俺たちの間で煌く。

「貴様のせいで私がどれ程の地獄を見たことか」

「いや、人違いだろ」

色々と言い合っている間に、審判が普通に俺たちをスルー。

場を盛り上げるために声を張り上げた。

『さあて、本日最後から二番目となりましたこの試合、準決勝二回戦目。対峙するのは一組の男女。』

その戦闘スタイルから二鬪流とも呼ばれ人気を集める三王家が長男、ツアンヴァレイ・アルモニス対、ここグレンダンでも名門、既に一振りの天剣を輩出しているリヴァネス家が長女、イクティノス・リヴァネス。

二人とも、準決勝までは準備運動だったと言わんばかりの圧倒的な

強さを見せてくれました。

しかし悲しいことに残りの天剣の座はあと一つ。そして決勝に上がれるのも一人だけ。

我々観客は、ただこの二人の戦いを見守ることしか出来ませんが、期待せずにはいられません！

この二人の剋が、技が、我々を魅了してくれる事を！

それでは始めましょう。 準決勝、第二回戦

』

俺は殆ど審判兼司会進行係兼解説者の長々しい演説を聴いていなかった。

そんなことよりもすることがある。

腰の剣帯から一本の錬金鋼を引き抜く。

それを見て、女 イクティノス・リヴァネスも自分のペースでゆっくりと引き抜く。

しかしまさか目の前の女がリヴァネス家の長女だったとは。

次女とは違いあまり表に出てこない変人との噂があったが、まああながち間違いじゃあないだろう。

「コレストレーション」

重なり合う声に反応し、錬金鋼が復元する。

余りにも拵えが簡素な黒鋼錬金鋼の太刀が俺の手に。

紅玉錬金鋼の両刃剣が女の手に。

賭け試合をしたときは彼女の錬金鋼が代わっていた。

前回も使用していたのは西洋剣だったが、幅はサーベルやレイピアのように細かった。

しかし今回は幅十五センチほどある、片手持ち・両手持ち両用の両刃剣。

これが本来の彼女のスタイルらしい。

なら、俺も端から全力でいきますか！

『 始めっ！！！！ 』

念異端子越しの審判の声と同時に、地面を蹴る。

それは女も同じだったらしく、試合前に離れた距離が一瞬でゼロへと変貌を遂げる。

一合、二合と剣戟が交錯し、それに遅れる形で火花が飛び散る。

片手を柄から放し、掌を突き出して衝剄を放つが、軽く首を捻られるだけで避けられ、少し距離が離れる。

お返しとばかりに剉が剣に収縮。

彼女が体を捻り、振り抜けば刃の軌跡をなぞるように剉の刃が発生し飛来。

俺は剉を込めた柄頭でそれを叩き壊し、少し離れた距離を詰める。

迎撃として迎えられた斬撃を、姿勢を低くすることで潜り抜け、地を這うような軌跡からの振り上げ。

顎先を掠めるかどうかのギリギリの線で避けられ、跳ね上がった切っ先が急停止。

一段変化。

斬り上がり斬り下ろしへ変化するが、引き戻された刀によって弾かれる。

が、同時に俺の膝が女の脇腹にヒット。

内力系活剉で強化された俺の脚力によって、女の体が軽く吹き飛び足が地面から離れる。

【外力系衝剉 蛇落とし】

上空に渦巻いていた俺の剉が、確かな形となって女の頭上へと現れる。

飲み込まれた者の体を引き裂く竜巻が、宙に浮いた女の真上から襲い掛かる。

「シッ！！」

女の口から声が漏れ、剄によって渦巻いていた大気が左右に霧散。

刃に炎が纏わり付いていることから見て、外力系衝剄の化鍊変化か。もう一振り、女が剣を横に薙ぎ、刃に纏わせていた炎が刃を離れ俺へと向かってくる。

【外力系衝剄 閃断】

俺が放った剄の刃が飛翔し、炎の刃とぶつかり合う。

同等程度の剄だったのか、互いに爆散しあい、火花と土埃を撒き散らし消滅する。

そして遮られた視界から砂煙を掻き分け、女が現れる。

「ちい
」

軽く舌打ちをして、女の斬撃を弾く。

それは先程と同じようなコマ送り。

互いに互いの得物を振るい、弾きあう。

ただ、違つとするとするなら俺の斬撃は全て迎撃の為に繰り出しているという一点のみ。

「おい！ さっき俺の所為で地獄を見たとか言ってたが、一体どういふことだ？」

強引に鍔迫り合いに持ち込み、顔を近づけ言う。

女は片手持ちの柄を両手で握りながら答える。

「貴様の所為で、貴様の姉に、アルシェイラ女王陛下に、陛下自らの手で、私を鍛え直された！」

「は…？」

余りにもト突拍子のない言葉に、一瞬呆ける。

呆けて、手の力が緩み、刃が滑る。

滑って女の刃が左肩から右脇へとめり込んだ。

「その所為で、一体どれ程の地獄を見たことか。何が『これくらい出来るでしょう?』、だ。あんな化け物の相手に一分間立っていられるか!」

「というか、なんで俺の姉と鍛錬してるんだよ!」

激情に任せ、刃を振るう女。

熱くなっているのに、剣筋や剄息が乱れていないところを見ると、相当扱かれたな、これは。

「なんで。なんでとは、な! 貴様、未だに知らされていないかったのか。ああ、知らされていないからこそ、困惑しているのか。ならば納得がいく!」

「なにを言っている!?!」

脇腹の傷から血が流れ、地面へと落ちる。

闘技場に点々と紅い染みを作っていく。

軽く刃は掠め始め、掠り傷程度の傷がいくつも増えていく。

「……私は、貴様の許婚だ」

そっと、耳に囁くようにすれ違いざまに言われ、先程付けられた傷口と対照的に右の肩口から左の脇へと剣が奔り抜けた。

傷口から血飛沫が噴出す。

右手で傷口を押さえ止血を試みるが、まるで効果がない。

練れる剄の大半を活剄に回し修復を図るが、激しく動けば激しく動くだけ傷口の治癒は遅れていく。

やばいな、これ。

そう思う心とは別に思考する心があった。

切り札の一つを切るしかない。

切り札とは、場に伏せているからこそ効力があるのであって、切ってしまえばその効力は失われずとも対策をとられることになる。

それが嫌だから出したくないんだが、致し方ない。

というか

「お前、なんでリヴァネス家長女が俺の許婚なんだよ！三王家の者は同じく三王家の者が、それとも天剣授受者の中から選ぶのが通例だろう！」

「貴様の姉の我俣だ！ ユートノール家には次男がいるだけで女は

おらず、ロンスマイアの長女は女王陛下が気に入られなかった。

王家の分家筋たる我がリヴァネス家ならば、紛いなりにも王族の血を引いているからなどという理由で、急遽白羽の矢が立ったのだ！」

裂帛の気合の下、すくい上げられた剣戟に俺はまともに刀で受けてしまい、手首を怪我するのを嫌って刀を手放す。

宙をクルクルと回転する刀の回収は却下。

俺は素早く次の手の投入を開始する。

「レストレーション！」

迫り来る剣戟を、辛うじて復元させた二丁銃の銃身部で受け止め、弾き返す。

そしてバックステップで距離を取り、引き金を引く。

計十三発の剽弾を女へと放つが、容易く見切れ、避ける事が出来ないものは剽を纏った斬撃によって両断される。

「しかし、私が弱いと陛下が言い、鍛錬を付けてあげる、とまで言い出した。それから二年間、ずっと地獄のような鍛錬だ。

朝早くに起こされ、炭素の塊のような朝食から始まり、スタミナをつけるのにこれを飲めと、得体の知れない卵を食後に。

その後に昼までずっと見えない攻撃にさらされ、昼飯に炭素。ま

た生卵を飲まされ、また鍛錬という名の暴力の雨霰。
この苦しみが、貴様に分かるか！！！」

八つ当たりだろ、それっ。

そう思わずにはいられない。

確かに俺が関係している事柄の所為でコイツは大変な地獄を見たよ
うだが、そのことに俺は全く関与していない。

モロにとばっちりだろ、これは。

連続で銃を撃つが、掠りもしない。

二十、二十六と引き金を引き、銃のスライドが引きあがる。

弾切れた。

剽弾を発射するこの銃とて、発射するために必要な物がある。

火薬の代わりに使われている物だってあるのだから、弾が切れたら
銃を撃つことなんて出来やしない。

「ああ、これは八つ当たりだ。 貴様の所為でないことくらい察し
はついている。

しかし、ならばこの憤怒、一体誰にその矛を向ければいい！ 一体
誰に責任を取らせればいい！」

全ての弾を避け、凌ぎきった女が俺に向かって駆ける。

一気に距離を詰め、剣を振り上げてくる。

「貴様以外におらんだ。この怒りをぶつける相手が。それに、私は認めぬ。貴様のようなフラフラと責任感のない者が私の許婚だと！」

全力での振り下ろし。

刃が俺に迫る。

「 02! 」

手札を一枚切る。

それ以外に方法が無かった。

俺の声に反応し、錬金鋼が変化。

せり上がっていたスライドが元に戻り、その代わりに銃身の下には漆黒の刃が出現する。

十五センチほど銃身をはみ出したそれで、交差するように構え斬撃を受け止めた。

銃剣。

それが俺の手札の一つ。

そしてそのまま剣を絡み取り、銃口を剣の腹へと持っていく。

全十三発。

一丁の銃に装填されている弾の全てを叩き込み、その衝撃に剣が押され、腕が泳ぎ体が隙だらけになる。

絶好の好機。

これを逃す奴は馬鹿だ。

俺は照準さえまともにつけずに銃口を女へと持っていく、引き金を絞る。

確実に当たる

はずだった。

しかし女は俺が銃身を持っていった瞬間に足に力を入れ、そのままバク宙。

神業としか言いようがない身のこなしで剄弾を避け、俺の背後へと降り立つ。

俺は腰を捻り、振り向きざまに銃身についている刃を女の背後へと叩きつける。

が、女は背後へと無理やり腕を回し、剣で受け止める。

「っ」

しかしそれは無理な姿勢であることに代わりはない。

衝撃を逃がしきれずに手首か、腕の関節でも痛めたのだろう。

小さく息を吐き、一瞬だけ眉間に皺を寄せた。

気にしていたら、その瞬間にでも俺の負けが分かる俺は追撃の手を緩めない。

銃身や銃剣の刃で殴りつけ、それを防ぐ女。

しかし右腕を庇っているのは目に見えて分かる。

至近距離での剄弾にも掠り始めた。

後ろへとバックステップで距離を開けようとするが、そんなことをさせる心算はない。

一刀足で開いた距離を詰め

「ちっ」

後方へと跳んだ足が地面に付いた瞬間、女は旋倒で一気に前へと出てきやがった。

虚を突かれ、俺は咄嗟に右手を引き戻し、防ぐが弾き飛ばされる。

クルクルと回る銃を尻目に、女の返し刀が俺の前髪を微かに切り裂き、顎から鼻にかけて弾き飛ばされる。

「っ、てえな！」

腰の剣帯から新しく造ってもらった錬金鋼を引き抜く。

もう一つの銃剣は既に弾切れで役に立たない以上、銃剣を手放す。

錬金鋼が復元し女と同じ両刃の洋剣が俺の手に納まる。

大振りの一撃で女を弾き、距離を取る。

女は腕の痛みの所為で動けず、俺は出血の多さの所為で動けない。

互いに息を乱し、必死に息を整えることに専念する。

「……………なあ」

「……………なんだ」

「次の一撃で最後にしよう」

「ああ、いいだろう」

まだ、次の決勝戦が残っている以上、ここでとことん最後の最後まで力を出し切るのは互いに良いことではない。

だから嫌っている俺の提案に女　イクティノス・リヴァネスは同意した。

俺は手にある新しい剣を一振りし、調子を確かめる。

ダイトメカニックに可能な限り俺の要望を聞いてもらって造り出されたコレは、昨夜出来たばかりで調子さえ確かめていないのが不安だが、そんな事を言っていられない。

「なあ、もしお前が俺をここで倒せたなら、お前の気は晴れるのか？」

「…さあ、な。そんなことはやってみなければ分からないことだ。ただ私は貴様にこの怒りをぶつける事だけを考えている」

そう言うと、イクティノスは持っている剣に剄を流し始める。

俺も剣に剄を流し、纏わせる。

奇しくも互いに最後に放つ剄技は一緒だった。

剡を練り上げ刀身を覆うように収縮させていく。

お互いに全開の剡量に錬金鋼が耐えることが出来ないのは、先程までの戦いで理解している。

故に勝敗は、単純に剡の錬度が、収縮技術が別ける。

異常な剡の高まりが、俺とイクティノスの間で風となって渦巻く。

「さて、それじゃあ往くか」

俺のその言葉が合図となった。

互いが互いに同時に一歩踏み込み、振り上げた剣を相手に向かって振り下ろす。

【外力系衝剡 閃断】

練りに練り上げた剡が刃を離れ、白き奔流となって放たれた。

対するイクティノスの剡は彼女の髪と同じ黄金色。

互いの剡がぶつかり合い、一瞬だけこう着状態を生み出すが、俺の閃断がイクティノスの閃断を切り裂き、彼女へと向かう。

膨大な剡の使用に硬直した体では、反応する事が出来なかったらし

い。

直撃。

それ以外になんとも言えないほど、見事に直撃した。

イクティノスは咄嗟に後ろへ体重移動し、吹き飛ばすことで威力の軽減を図る。

闘技場の壁に叩きつけられ、一瞬息を詰まらせる彼女の喉下に、俺は旋廻で距離を詰め刃を当てる。

「俺の勝ち、だな」

「…くそ、っ」

いくら互いの閃斬の衝突で俺の閃斬の威力が減少しているとはいえ、彼女の体の自由を奪う分には十分だったらしい。

そのまま気を失い、倒れそうになったところを俺が抱きとめる。

審判が俺の勝利を告げ、民衆がその興奮を声で表す。

俺はイクティノスを抱き上げ、闘技場を後にする。

一応、許婚らしいからそのまま闘技場に残しておくのはどうだろう
と思ったからだ。

とりあえず、医務室にでも運んでおけばいいのだろうか？

俺の体の傷なら、決勝戦までの休み時間があればほぼ全快するし支障はない。

さて、あとは決勝戦か。

レイフォンと俺。

まあ、どちらが勝っても別に構わないのだけど。

07 (後書き)

感想とか、反応がない……

このままこれ書いてていいんだろつかと少し思うので、誰か感想とか反応をください！

決勝戦。

準決勝での疲れをとる、という名目で一時間程度の休憩が取れ、終わった。

イクティノスとの闘いで負った傷の粗方は治癒し、問題は剽脈の疲労程度のもの。

なら、何も問題ない　　そう言いたい相手がレイフォンでは心許無い。

薄暗い控室から出れば、眩しいばかりに輝く太陽。

そして、今日最大の歓声。

今日、漸く全ての天剣授受者が揃う。

最後の天剣を握る者がこの決勝戦で決まるんだ、興奮しない方がこの都市では可笑しい。

レイフォンと肩を並べ闘技場中央へと寄っていく途中、歓声に紛れ込ませるように、レイフォンが言う。

「兄さん、どっちが勝つ？」

そう訊いてきた。

それはレイフォンか俺のどちらかが天剣授受者になるのか、という問いかけ。

確かに、レイフォンからしたらどちらが天剣になったとしても構わないのだろう。

俺が天剣授受者になろうと孤児院で暮らしている以上、手に入れた金はそのほとんどを孤児院へ納めることになるから。

そういう俺も天剣には特に興味がない。

だから、まあ。

適当に戦って、適当に勝敗を決めるか。

試合開始の合図とともに剣撃が重なり合い、火花が飛び散る。

俺が衝剄を放てばレイフォンが相殺し、レイフォンが閃剄を放てば俺が切裂く。

そんな攻防が数十と続く。

どちらが天剣授受者になるのか。

それを打ち破る揺れ。

左右の揺れではなく、間違いなく上下の揺れ。

罅迫り合いの最中だった俺とレイフォンは、呆気にとられた。
けたたましいサイレン。

このサイレンが告げるのはそう 汚染獣の襲来。

『Re::write』

第一章・ビギニング・セカンドライフ (08)

防護服を身に纏い、俺は見下ろす。

決勝戦の熱狂の中、突如突き付けられた汚染獣の襲来だったが、グレンダンの住民は何時も通りのことと割り切り、迅速に地下シェルターの中へと避難していった。

何の騒ぎもなく避難しきった住民を見ると、グレンダンの異常性が分かるというものだ。

こういってお祭り騒ぎの最中に凶事が発生したと放送されれば、逃げまどう人波に吞まれ将棋倒しになる人や、コケて怪我をする人、迷子になる子供がいてもいいはずだが、それが無い。

素晴らしき異常であったが、それが習慣的というか、二週間に一度のピクニク的な行事になっているグレンダンにおいては、それが普通。

後方待機を言い渡されている俺は、そんなことを考えながら時間を潰すしかない。

今回の汚染獣の襲来は、言ってしまうえば予定調和のものではなく、超上空からの襲撃。

それも特殊な進化を遂げた老生体だったらしく、刀自の念威端子の探知領域でも感知できなかつたらしい。

それもまあ、天剣授受者選定式の監視などをしながらじゃあ、無理もないか。

刀自一人に負担がかかるこの監視網のシステムは如何にかしないと

いけないと思うんだがねえ。

『ごめんなさいね、ツヴァイさん』

目の前にはためいたのは青色に光る蝶。

声は念威端子越し。

考えていた刀自だ。

『折角の晴れ舞台だというのに無粋な横槍を入れさせてしまって、本当にごめんなさい』

申し訳なさが、念異端子越しであっても感じ取れる声色で謝られた。

「いえ、お構いなく。特に問題はありませんので刀自が気にする必要はありませんよ」

そう念威端子から発せられ、ひらひらと戦場へと飛んで行った。

さて、話し相手がいなくなった。

俺の部隊の連中は、戦争中に話をするほど気軽な連中というわけも

なく、そもそも話題が尽きてしまっている。

決勝戦頑張ってください、天剣へあと一歩ですね、勝ってくださいね、等々。

ありきたりすぎる事を言われウンザリしていた。

だから暇つぶしに戦場を眺める。

だから偶然見つけることが出来た。

あり得ない筈の人物を。

レイフォンなら分かる。

あれはまったくの無傷で決勝まで勝ち上がったし、剽の消費もほとんどが回復していた。

それに汚染獣の襲来は稼ぎ時なのだ。

その戦果によって報酬が決まる以上、気合の入りが他の武者とは違う。

だから汚染獣と戦うレイフォンの姿を発見したとしても納得できる。

が、お前は違うだろう。

なんでお前が戦っているんだよ、イクティノス・リヴァネス！

闘い。

それこそが我が人生。

そう彼女が考えるようになったのは何時頃からだろうか。

イクティノス・リヴァネス自身、もはや覚えてはいない。

リヴァネス家の長女として生を受けた彼女は、幼い頃から両親に言われ続けてきたことがある。

グレンダンの為に。

王家の為に。

その二つの為に生きなさいと、言われ続けてきた。

だから彼女は剣を取った。

才覚があると言われたから。

天剣授受者になり、グレンダンの守護者となることが、一番グレンダンの為になると考えた。

だから強くなろうとした。

だから闘い続ける。

そして戦いが彼女の全てとなり、人生となった。

十五年間、グレンダンの為に人生を捧げ、闘争に身を置いてきた。

しかし、しかしだ。

勝手に許嫁を決められ、それに従うことを強要されるのはグレンダンのためなのか？

他にも女など腐るほどいるというのに、何故私なのだ。

今更、武芸者からただの女に戻れと？

しかも王族という立場に胡坐を搔き、フラフラとしている男の元に、彼女は嫌だった。

だから女王陛下の元に、無礼であろうとも直談判をしに行った。行って、条件を突き付けられた。

天剣授受者となることが出来たのなら、婚約を破棄してもいいと。

しかし、彼女は敗れた。

ツァンヴァレイ・アルニモス

許嫁に。

悔っていた、というわけではない。

むしろ万全の状態で挑み、負けた。

いくつもの道場に身を寄せては一年にも満たない期間で辞めて、また新たな道場に身を置く。

何かを極めようとする気概さえない男。

そんな軟弱で、責任感の無いあの男に、負けた。

それが彼女を、彼女のの今までを否定する。

一体私の人生は何だったのだ。

憤りを感じながら刃を振るう。

銀閃が奔り、雄性体が血を撒き散らしながら死んでいく。

剣を振るうたびに体が軋む。

準決勝での戦いが、尾を引いている。

それはこの戦いに出る前から分かっていたことだ。

しかし、それがなんだ。

たかが体の不調で戦いから逃げる者など、グレンダンにはいらぬ。

グレンダンの為に。

自分自身のの存在意義を失うわけにはいかないのだ。

だから 熱。

「 え? 」

間の抜けた声が口から漏れる。

右の二の腕。

その付け根が熱い。

剣を握っていた腕。

利き腕。

視線を奔らせ、理解。

理解し、脳が正常に認識。

痛み。

無い。

錬金鋼を握っていた腕が、二の腕の付け根から無くなり、紅い血が噴き出して

……

「あ、あああああ、あ、あ、あ、っ、！？」

悲鳴が漏れた。

いや、口が勝手に叫んだ。

肺にあった空気を全て吐き出さんがごとく、叫んだ。

残った左手で右腕の断面を抑え、両の膝を付く。

頭上に影。

未だに口は悲鳴を上げ続けながら、顔を上げれば幼生体の口。

あ、死んだ。

片腕を失ったことに錯乱し、致命的な隙を作ってしまった。

いや、そもそもその前に心を乱したことが原因か。

体が動かない。

こんなところで。

こんなところで、終わりなのか。

私は、私は何も、グレンダンの役にたつてはいないというのに。

幼生体の口が閉じられ、歯が首筋に食い込み　　四散。

幼生体の体が微塵に切り裂かれて死に、彼女は死を逃れることが出来た。

青の血霧。

その先に奴がいた。

肩で息をして、必死の表情で周囲にいる幼生体を一振りの元、殺し尽くす。

ああ、助けられたのか。

彼女はそう理解して、暗転。

視界がグラつく。

気が付いたら、奴の腕の中。

抱きかかえ、旋廻で高速移動しているらしい。

部隊長に奴は何かを叫び、戦場から遠ざかっていく。

そして彼女は

心臓が止まるかと思った。

あと一瞬でも駆けつけるのが遅れていたら、俺は許嫁を失っていただろう。

それほどに際どかった。

姿を見つけて、副隊長に隊を任せてまで駆けつけた俺の直感に感謝しなければならぬだろう。

戦闘はまだ続いている。

病室のパイプ椅子に座り、

37時間もの大手術だった。

腕が食われたのだ、それも当然だが、それ以上に腕に張り巡らされていた剷脈の消失が痛かったそうだ。

剷脈を一気に大幅に失ってしまった者は、剷脈異常という疾患を抱える割合が高い。

これは剷脈を正常に循環できなくなることから起こる疾患だ。

それを起こさないようにするために、剷脈のバイパス手術というものがある。

グレンダンという狂った都市では、汚染獣との戦いに明け暮れるため、負傷者の数と比例して医療の技術が発達しているために、成功率は他の都市と比べれば高いらしいが、それでも分の悪い賭け程度のものらしい。

手は尽くした。

そう医師には言われた。

この分野において権威といってもいい医師に、そう言われたのだ。ならばあとはイクティノスを信じて目を覚ますのを待つしかない。外では未だに汚染獣との戦闘音が聞こえてくる。

今回は雌性体の巣穴に、グレンダンが足を突っ込んでしまっただけなのだが、随分と長引く。

そう思っていると、呻き声。

イクティノスへ目を向けると、その目が開いていた。

「うっ、あ …… 何処だ此処は」

「病院だ」

短く答える。

イクティノスは俺に目を向ける。

そして顔を歪めた。

「目を覚ました、ということとは手術は成功、といったところか」

「何の話 ……」

体を起こそうとしたイクティノスは、凍りついた。

急いで向けた視線の先には、ない。

右腕は消失していた。

今回の手術はいつてしまえばただのバイパス手術でしかない。

故に右腕の再生手術をしていないし、ついでに言えば再生手術には元となる細胞などが必要になる。

胃なら胃の、腸なら腸の。

そして、腕なら腕の。

汚染獣に食われてしまった右腕は、汚染獣の腹の中に収まってしまった為に、もはや再生手術は不可能なのだ。

仮に右腕の残骸があったとしても、再生できたその腕には剝脈がなく、また他者の武芸者の腕の移植では剝脈異常が確実に起こる。

そのことを、イクティノスは理解していた。

呆然とし、自身の右腕を見てベッドに深く身を沈める。

少し意外。

「取り乱さないんだな」

「取り乱しても、腕は帰ってくるものか」

言って、大きな溜息。

そして押し殺した笑い声。

気が触れたような、泣き笑い。

「 見ての通り無様な姿だ。 武芸者として私は、もはや何の役にも立たん。

幼い頃よりグレンダンの為にと剣をとってきたが、これでそれも終わりだ。

片手では、もはや自分の身ぐらいしか守ることが出来ん……貴様も笑え」

「笑わんさ。 それに何時か自分の身にも同じようなことが起こるかと思うと、笑えない。 それに」

イクティノスが俺を見る。

「もしその片腕では何か一つしか守れないのなら、俺がお前を守ってやるからお前はグレンダンを守れ。そうすれば武芸者として生きていけるだろう？ だから俺と結婚しろ。そうすれば俺は お前のために死んでやるよ」

俺の言葉に啞然とするイクティノス。

「貴様は、勝手に決められた許嫁で納得できるのか？」

「別に気にしない。情なんていうモノは結婚して、形に入ったら勝手についてくるものだろ？」

「好きになれるのか？ こんな女らしくなくて、腕がなくて、こんな欠陥だらけの私を？」

「少なくともそういうことで悩んで、しおらしいことを言っている所は女らしいと思うけど？」

「なっ!？」

驚かれ、顔を赤くして左手で枕を投げつけられる。

当然それを避け、俺は言う。

「で、俺と結婚してくれるのか？」

直球な言葉に、イクティノスが息を詰まらせたが、少し考えて言う。

「条件がある」

「条件？」

「ああ。私の夫となるのなら、天剣授受者になってみる。弱い男は嫌いだ。私に勝ったとはいえ、ただそれだけの男とは結婚などしたくない」

「了解」

負けられなくなった、か。

これは負けられなくなった。

突然のサイレン。

そして雄叫びのような戦声。

これは、汚染獣を全て殺し尽くしたということ。

「汚染獣を殲滅したのだな」

「みたいだな。さて、それじゃあ俺は行くわ。レイフォンに負傷らしい負傷がなければ、近いうちに決勝戦が再開されるだろうからな」

俺はイクティノスに背を向け、病院の引き戸を引く。

その背中にイクティノスが声をかける。

「取れよ、天剣を」

「ああ」

レイフォンや孤児院のみんなとも、これでお別れ、か。

それも仕方ない。

だから、ああ。

レイフォン、お前は俺のために負ける。

08 (後書き)

初詣行ってきました。

神社の雰囲気っていいね、やっぱり。

しかし大吉引いたのに就職関係のところで大望叶わずって、今年から就活なのにどうすんだよ、これ。

レイフォン・アルセイフは悩んでいた。

決勝戦。

汚染獣の襲来によって中断されてしまった天剣授受者選定式の再開の日が決まった。

これはいい。

レイフォンにとって、天剣授受者になることはそれほど重要なことではない。

決勝戦の相手であるツヴァイもこの孤児院で暮らしている以上、天剣授受者にツヴァイがなったとしても天剣授受者が得られる膨大な金は孤児院を潤し満たす。

これで餓死する義兄弟達を見なくてすむし、空腹に泣く者もいなくなるだろう。

そう思っていた。

さっきまでは。

つい先ほど、ツヴァイは孤児院に来た。

中断された決勝戦より、ツヴァイは実家であるアルモニス家に戻っていたのだが、用事があると言って孤児院に来たのだ。

レイフォンが呼び出され、そして言った。

ツヴァイはもう孤児院へは世話にならないと。

理由は簡単だ。

サイハーデンで、もう学ぶことはない。

あとは一身上の都合により、とも言っていた。

サイハーデン刀争術師範であり孤児院たちの父親であるデルクにそう言っ、て、孤児院から出て行ってしまった。

もう、ツヴァイは孤児院に籍を置く必要がない。

ということは、今までツヴァイが稼いで孤児院に入れていたお金が、収入がなくなる。

幸い貯えがある故に、すぐにどうこうなるものではないが、それは節約に節約を重ねているから。

何もしなければ二・三カ月で無くなる蓄え。

そしてレイフォン一人が頑張ったところで、その蓄えはジワジワと無くなり、最終的には今のレイフォンの収入では足りなくなる。

……どうすればいいのだろう。

そこでレイフォンは考えがまとまらなくなる。

自分なりの答えらしきものは、すでに見つかっている。

しかしその答えに自信がなかった。

決勝までの、日数もあと僅か。

それまでに答えを見つけないければいけなかった。

しかしツヴァイは何も言わずに天剣になるなり、決勝の直前に言うた。レイフォンの動揺を誘う、ということもできたはずだがしなかった。

ツヴァイなりの気遣いといえる。

勝てるだろうか？

準決勝でのツヴァイの戦い方は、普段のものと少し違った。

ツヴァイが銃衝術を使えることをレイフォンは知らなかった。

自分は何一つツヴァイのことを知らなかった。

鍛練で刃を交わした時とは違う戦い方。

奥の手をいくつ持っているのか。

いや、関係ないのか。

そうレイフオンは思った。

勝てるか、勝てないか。

そんなことは、関係がないのだ。

勝たなければいけない。

勝てない、などというマイナス思考は刃を鈍らせる。

故に勝つ。

それだけを考える。

尊敬し、目標としている兄に勝つ。

全ては、孤児院の為に。

『Re:write』

第一章：ビギニング・セカンドライフ（09）

決勝戦。

一度目は汚染獣という、ある意味空気を読んできた化け物のおかげで中断された。

しかし今回は刀自が頑張ってくれたおかげで、地上・上空・地下その全てに、汚染獣がないことが判明している。

それも向こう一週間、グレンダンが急に反転したとしてもそれは変わらないらしい。

一体どれ程の念威をもってすればそれが分かるのかと思いきもするが、それでこそ刀自とも思う。

つまり、俺とレイフォンの決勝戦を邪魔する相手は皆無であると言えるわけだ。

二度目の決勝戦であるというのに、湧きあがる歓声は一度目と変わらず地鳴りのように鼓膜を打つ。

よくよく見てみれば、ボツカリと空白地帯。

アルシエイラや興味がなさそうなりンテンス、その他天剣授受者が勢ぞろい。

その団体に近付き難く空いてしまっていた。

横に並んで歩くレイフォンを見る。

その表情に迷いはなく、決意を持った眼差し。

それでいい。

全力の、その先。

死力を尽くしてこそ、この決勝戦に相應しい。

闘技場の中央。

互いに向き直る。

「兄さん、負けないから」

レイフオンの声。

司会者の声に、負けない力強い声。

「俺にも理由があるから、負けられないのはお互い様だ」

「そつだね　だから」

互いに譲れない。

ならば。

「勝負」

司会者の前口上の途中。

そんなものは関係なかった。

互いが互いに納得し、その力の優越を付ける。

それに、俺たち以外の合図など邪魔。

同時に錬金鋼を復元。

レイフォンは刀を。

俺は剣を。

司会者の戸惑い。

瞬時に切り替え開始のゴングを鳴らそうとするが、それより早く俺たちは動く。

旋剄の加速からの斬撃。

総てを斬り伏せる閃きと、叩き斬る閃きがぶつかり合い、鏝迫り合いをせずにそのまま離脱。

旋剄の連続使用による高速戦闘を、俺とレイフォンは同時に選択。

故に戦闘スタイルはヒット・アンド・アウェイ。

踏み込みで地面が砕け、次の瞬間には俺とレイフォンの中間地点で衝撃と火花が飛び散る。

体捌きと移動速度はほぼ互角。

剄量では俺が有利だが、剄の最大使用限界量が互いの錬金鋼におい

てほぼ同じである以上、それは関係ない。

剋量で優位な俺が持久戦でも優位だと思うかもしれないが、それは間違い。

純粹な刀技においてレイフォンの方が上をいく以上、その微かな差が長期戦においてレイフォンに勝利の天秤が傾く。

故に俺に残された勝利への道標は短期決戦。

剋を活剋以外に別口で練る。

細心の注意を払い、レイフォンに気取られないように練り上げる。

剋が微かに体から放出され続け、旋剋による高速移動で闘技場に充滿していく。

下準備は整った。

ならば実行に移すのみ。

都度五十三回の激突を終え、距離を離す瞬間、俺は何時もよりも数メートル多く距離を取る。

そのことを不審に思ったレイフォン。

瞬時に状況判断。

俺が剣帯に手が伸びるのを見て、剋技の発動。

【サイハーデン刀争術 水鏡渡り】

旋剄を超える超高速移動術で俺へと肉厚するが、遅え！

剣帯から取りだした錬金鋼を復元。

それは素人目から見て消失したかのように見えただろう。

が、天剣級の実力者には悟られた。

レイフォンは水鏡渡りの最中に急遽剣を掲げる。

そして爆破。

爆煙がレイフォンを包むが、視界を遮られるのを嫌い瞬時に旋剄で横合いに抜ける。

がそれも予測済みだ。

爆破がレイフォンを囲む。

その爆破を撥ね退ける、剄技。

独楽のように回転し、周囲に衝剄を放つことでやり過ごしやがった。

レイフォンの周囲には、赤く加熱した線が奔る。

それを閃断で断ちきるレイフォン。

一瞬の間。

「中々やるね、レイフォン」

「…周囲に剉をばら撒いて、鋼糸を使って着火・爆破させてるんだね、兄さん」

「ご明察。まあ、鋼糸が加熱して色を持つてるからね、バレて当然か」

朗らかに話しながらも俺は残りの鋼糸を展開。

レイフォンはレイフォンで、俺の隙を窺っている。

周囲の観客は俺とレイフォンの攻防に言葉を無くし、そして俺とレイフォンが止まったことで声を戻す。

爆発のような歓声が、合図となった。

その瞬間、最終工程となった鋼糸は展開され、レイフォンは練っていた剉を爆発させる。

襲いかかる鋼糸。

レイフォンはそれをものともせず、全てを衝剉で叩き落とす。

同時に二十本しか操ることのできない俺では、レイフォンの突撃を

止めることはできないか。

そう判断し、握っていた剣を振るう。

そしてそのまま先程と同じ、高速戦闘へ 行く前に。

斬撃を放ち離れるレイフォンに向かい刀を一振り。

完全に剣の間合いから離れたそれに、一瞬レイフォンは戸惑い、切り裂かれる。

剣の鏢から伸びる極小の鋼糸。

それがレイフォンを切り裂いたのだ。

剄を使わず剣を振るうことによつて操ったそれを、初見で避けることはほぼ不可能。

利き腕ではなかったのが残念すぎるが、それでも好機。

俺は錬金鋼で刀を復元しながら水鏡渡りを発動。

腕を切り裂かれたことで体が泳いだレイフォンの懐へ、潜り込む。

未だに血飛沫が舞う中での大技。

サイバーデン刀争術・混合接続。

下から振り上げる居合抜き。

その刀身は赤く染まり、炎が奔る。

【サイハーデン刀争術 焰切り】

返し刀。

【サイハーデン刀争術 焰返し】

刀と刀がぶつかり合い、火花が散る。

刀と刀が一瞬の鏝迫り合い。

【サイハーデン刀争術 逆螺子】

刀身に絡めた剄の二重螺旋が、レイフォンの逆螺子によって相殺される。

闘技場に充満していた俺の剄がとぐるを巻き、レイフォンの頭上に出現。

【外力系衝剄 蛇落とし】

【外力系衝剄 焰蛇】

咄嗟の判断。

あの絶妙のタイミングでも、全て受け切られた。

その恐ろしい刀技に、内心驚愕しながらも、それでもそれは予想の範囲内。

辛うじて受け切られたが、そうだからこそ、この勝負はもらった。

外力系衝剄同士の相打ちに、砂煙が舞い、互いの視界を一瞬遮る。

【外力系衝剄 轟剣】

互いの技が相打った時のことを考えての二段構え。

ほぼ間の無い状態での大技の連続に、俺ではなく錬金鋼が悲鳴を上げるがこの技まではもたせるだけの自信はあった。

此処までの連撃に漸くレイフォンが一刹那、発動が遅れる。

それで十分だ。

そう思ったが

「　　っ、うおおおおおっつ！！」

今まで聞いたことのない、レイフォンの雄叫び。

必勝を期した轟剣がレイフォンの黒鋼錬金鋼を半場まで触れ、停止。瞬時に刀に纏わせた剄で、辛うじて鰐迫り合いに持っていかれた。

称賛に値する。

あのタイミングで此処まで剄を捻り出し、鰐迫り合いにまで持ち込んだことに。

だが！

もう既に轟剣として形を保っている剄技に、さらに剄を流し込み、押し切る。

俺とレイフォンの錬金鋼が、排熱機構のスペックを凌駕する剄の余熱に加熱され、刀身がオレンジのような赤へと色付く。

徐々に俺の轟剣がレイフォンへと近づき、誰の目から見ても勝敗が

「負けられ、ないんだあああっ！」

初めての勝利への渴望。

それが潜在能力を解放したのか。

鏢迫り合いをしていた刀身に収縮して纏っていた剄が衝剄となり、俺の轟剣へと浸透。

内部からの多数の斬撃で錬金鋼を四散させやがった！

咄嗟に手を離し、俺への被害を軽減させるが、左手に浸透していた剄が俺の腕を内側から引き裂くっ！

「ギッツ！？」

予想外。

活剄で浸透剄を抑え込むが、左手が弾け態勢が崩れた。

一瞬の間が出来る　　が、それが限界だった。

レイフォンの黒鋼錬金鋼が剄技に絶えれず爆破。

レイフォンも咄嗟に錬金鋼を手放すが、それはつまり、唯一の武器を手放したことに他ならない。

復元した錬金鋼を右手に、レイフォンに突き付け、レイフォンには武器がない。

俺の左腕は内側から切り裂かれ血だらけだが、それでも動く。

勝敗はついた。

幾らレイフォンとはいえ、これ状態から俺に勝利することは不可能だ。

レイフォンは俺の顔を見る。

初めての負けられない戦いに、いや、初めて勝ちたいと思った戦いに負けた。

そんな表情をし、顔を伏せる。

「……………負けました」

か細く、悔しさの滲み出た声で、レイフォンは敗北を宣言した。

あっけないと言えばあっけないが、それでも天剣授受者を決めるこの試合においては相応しい幕切れとも言えるだろう。

こうして俺は、十二本目の天剣　ヴォルフシュテインの授受者となった。

花瓶が、壁に叩きつけられた。

材質に意匠にと、此処グレンダンで高名な陶芸家が凝らせるだけの質と技術を凝らした壺が、音を立てて砕け散った。

砕け散った破片は大理石の床へと落ちていき、さらに破片は小さく砕ける。

おそらくグレンダンで一番高価で芸術的価値のある壺を投げたミンズ・ユートノールはそれを見て、腹の底に煮えたぎる怒りが引くこととはなかったが、一瞬の激情が引くのを感じた。

前々から気に入らない壺だった。

ミンズの兄であるヘルダー・ユートノールが、グレンダンの女王であり、彼の婚約者でもあったアルシェイラから送られた壺。

それは彼女を象徴するようにミンズは幼少の頃より思っていた。

だからその壺を壊し、激情が引いた。

引いていなければ、彼は怒りのままに王宮へと乗り込み、行われていたであろう祝宴をブチ壊しにかかっただろう。

それだけでなく、錬金鋼を復元し、その刃を彼の従弟へと……

「何故、私ではない」

呟く。

自分のありのままの気持ちを。

同じ三王家に生まれた武芸者。

ユートノールとアルモニスという違いはあるが、それでも同じ三王家。

ならば自分が選ばれてもよかったではないか。

いや、自分が選ばれるべきだった。

ミスは青年と少年の狭間にいる歳だ。

が、ミスよりもツヴァイは若い。

少年と言ってしまえる歳であり青年と言ってしまつには少々若い。

一応グレンダンの法律上は結婚さえできる歳ではあるが、それでもまだ少年を抜けきっていない。

自分よりも若い。

そして性格は姉譲りで傲慢。

少なくともミンスはそう思っていた。

散々虚仮にされてきたのだ。

老面衆の対応においても、ツヴァイは面倒くさいという理由でミンスに押し付けてきた。

面倒くさいのはミンスも同じだというのに。

だが高圧的な態度、そして目線でミンスにやらせてきた。

先人たちの後始末を。

そして今日、ついにツヴァイは天剣を手に入れた。

天剣授受者選定式で優勝して。

ミンスには出ることさえさせてもらえなかった、選定式で優勝して。

そしてツヴァイはツァンヴァレイ・アルモニスからツァンヴァレイ・ヴォルフシュティン・アルモニスへと、最後の天剣授受者の席を手に入れたのだ。

ほぼ同じ血が流れているはずなのに、この違い。

「これは陰謀だ」

再び怒りに震え始めた体を押さえながら、ミンスは言った。

妄言ではない。

実際、確執があった。

ユートノール家とアルモニス家の間では。

ヘルダーは婚約者のアルシエイラを捨てた。

家の侍女と駆け落ちしてしまったのだ。

それをアルシエイラは苦笑を示しただけだった。

順当にいけば次の婚約者にはミンスが選ばれるはずだが、未だにそういう話はない。

それはアルシエイラがヘルダーのことを真摯に愛しているからだという噂もあるが、ミンスはそう思っていない。

むしろ逆。

自分を捨てたヘルダーを、そしてユートノール家を恨んでいるのだ。

そして不幸はそれだけではない。

ミンスの両親はすでに死に、ユートノールはミンス一人きりだ。

ミンスが死亡した場合、そのあとにユートノールの名を継ぐのはミンスの父の兄弟ではない。

彼らは継承権が低い。

それは三王家法に明記されている。

それならば誰がユートノール家を継ぐのかといえば、残り三王家の当主の子供からとなる。

アルシェイラには子供がいない。

しかしロンスマイア家には子供が数人いる。

アルシェイラは合理的にユートノール家を滅亡させる気だ。

そうでなければ、十二人目の天剣授受者に三王家の従兄弟連中の中で年上である自分が選ばれてしかるべきだろう。

だが選ばれたのはツヴァイだった。

自分は選定式に出て、実力を示す機会さえ与えられなかった。

策略だ。

ミンスはそう信じる。

「なら、私にも考えがある」

この考えが正しいのであれば、アルシェイラはミンスを近いうちに殺す。

座して死ぬつもりなど、ミンスにはない。

「……その立場が絶対不可侵だとは思わないことだ」

追い詰められた鼠でさえ、猫を噛むのだ。

ならば自分も生き残るために、牙をむこう。

整ったミンスの横顔に、その若さに似合わない凄惨な影が張り付いていた。

かつてない、賑わい。

サイバーデン刀争術の歴史上、ここまでの賑わいは未だかつて無かったのではないかと、俺は思う。

道場の中にいた時から感じていた劉で、武芸者の数はおおよそ分かっていたが、視覚に捉えるとその多さに圧倒されそうになる。

俺とデルクが道場から出てくると、道場の前で整理券を持ち順番待ちをしている武芸者がざわつき始める。

百人は下らない人数の武芸者。

孤児院の子供やリーリンレイフォンに孤児院を去っていた大人達までもがてんでこ舞で対応に追われていた。

いきなり百人ほどの人が来たところで、その人数を収容することが出来ない。

ルッケンスやその他大手の道場ならば話は別だが、昨日までかつこ
う鳥が鳴いていたサイハーデン道場では十数人の稽古を見ればい
い方。

故に今現在は署名してもらうにとどまる。

今まで世話になったことの礼を正式にするために俺はサイハーデン
の道場に来ていたのだが。

そしてこれからの活動方針をデルクから聞いた。

が、あまりに考えがなかった。

原作でも、同じように対応していたことを考えると、そりゃあもとの
もくあみになるのもうなずける。

だからこそ、俺は少々助言をした。

鍛錬を始める前に、確りとサイハーデン刀争術の理念を伝えるべき
だ、と。

確りと理解し、それに納得した者だけを門下生にしなけれな、とい

うか理念を確りと伝えなければ、卑怯な刀技と思われても仕方ない。教育者としては優れているが、人間として不器用なデルクは、おそらく理念を正確に伝えるのを忘れる。

だからこそその助言。

これでレイフォンは賭け試合をせずに済むだろうか。

中途半端な原作知識しか持っていない俺だが、大筋が変わってきたのは感じる。

レイフォンが天剣を手にしなく、そして道場経営をデルクがこの時点で始める。

それはレイフォンが闇試合をしても問題がなくなり、道場の稼ぎで孤児院が潤うということ。

思いの外、良い方向に進んでいた。

そう思いながら、リーリンとレイフォンが昼食を食べているテーブルへと近づく。

「あ……」

先に気付いたのはリーリン。

「リーリン、私たちにも炊き出しを取ってきてくれないか」

「分かった」

デルクの言葉に頷いて、リーリンは炊き出しをしている方へと駆けて行った。

珍しく気を利かせてくれたデルクに感謝しながら、リーリンを見送って、俺は口を開く。

「随分と大人しいな、レイフォン。そんなに俺に負けたのが堪えたか？」

「……うん。負けたくないと思ってたのに、負けたから。それが悔しい」

戦闘時以外では珍しく、眠たげな表情をしていないレイフォン。

「初めてなら、そんなもんだらうよ。実力的には同等で、常に勝ちを切望している奴に、勝てる道理がどこにあるよ」

「そう、だね。 うん、そうだ」

俺の言葉を飲み込み、納得するように頷くレイフォン。

「なら、今後は切望しろ。」 求めよ、然らば与えられん」だ

「どつという意味、それ？」

レイフォンの頭の具合が分かるコメントだった。

それでこの場の真剣で、しんみりした雰囲気霧散した。

まあ、それでこそレイフォンらしいといつかなんといつか。

「すみません」

突然の声。

聞き覚えのない声に、俺の背後からかけられたことから振り返る。

そこにいたのは一人の少年。

銀髪で線の細い体格。

年齢的には俺と同年ぐらいか。

眼鏡をかけた少年は、人当たりのいい笑顔を浮かべていた。

「サイハーデンの道場は

」

そこまで言って、少年の表情が固まった。

「ええ、すぐそこですよ。入口で整理券をもらって番号が来たら、署名して今日はお帰りください」

「い、いえ、違うんです。実は僕は外来者です」

外来者。

それは都市の外から放浪バスでやってきた者のことをいう。

「昨日の試合を偶然、見せていただきました。とても感動したので決勝戦で戦ったどちらか一人にお会いできれば、思っていたのですが」

まさかここでお二人にお会いできるとは、と興奮した様子で言った。

「それは運がいいね」

俺の一言にこの場にいる全員が首をかしげた。

「もし仮に、このレイフォンが天剣になっていたら、こいつは二カ月程度、此処にいなかっただろうからな」

「え？」

疑問の声はレイフォン。

「当たり前だろ？ 天剣授受者とはこの都市の武芸者の頂。全ての模範とならなければならぬ。」

「ということはそれなりの作法と出で立ちの準備をしなければならぬし、天剣の調整や都市外装備のサイズ取りからデザイン決めと色々。」

王宮に籠りっぱなしになるのは目に見えてるよ」

「兄さんは？」

「俺が誰だか忘れてないかい、レイフォン？ ずっと孤児院にいたけど一応は王族だよ。」

「作法や出で立ちには問題ないし、天剣の調整も今使っている錬金鋼の設定をそのまま流用すればいいだけだし、サイズ取りも同じ。つまり此処でのんびりと飯食ってても何の問題もないんだよ」

だから運がいい。

この少年が俺たちに会えたのは。

俺たちはこの後、軽く自己紹介をして取りとめもない会話を昼飯を

食べ終わるまで続けた。

剽が奔る。

体に流れる剽を意識的に加速させ、流れに意味を持たせていく。

いや、正確には剽脈を通る剽には意味など無い。

しかし剽を剽技へと昇華する過程で、昇華しやすくすることはできる。

それは体術であったり、独特な動きであったり、声であったり、儀

式であったり。

そして剄技が発動する、という一歩手前まで持っていていき、そのまま形にせず放出していく。

初老生体戦。

それが何時になるのかは、神のみぞ知るっといった具合だ。

だからこそ、俺は天剣という錬金鋼の至高に、早く慣れる必要があった。

王宮の庭の芝生を踏みしめる。

剣が下段から上段へと振り上げる。

空気を引きちぎり、裂けた空間に空気が戻りきるまでに振り下ろす。

そして

「レストレーション05」

形状変化。

俺の音声を認識し、剄の変化を読み取った天剣がその姿を変える。

槍。

得物の変化と共に間合いも変化。

それに対応した流派を選択し、型を繋ぐ。

三条の突きを放ち、練った剄を発動ぎりぎりでも霧散させる。

さらに天剣の形を変える。

「随分と器用な事をしているな」

聞き覚えのある声。

何時もは自分の部屋に籠って、宙に舞う埃の数を数えるという不毛な遊びに興じているリテンスが、珍しくも王宮にいた。

「天剣をあと十一本貰えれば、こんな面倒臭いことしなくて済むんだけどねっ！」

体を動かすことを止めず、そう答える。

それは事実。

天剣なんて錬金鋼、一本だけじゃあ俺の戦闘スタイルに合わない。

多数の戦闘スタイル、武器、剄技を持つことによって、多種多様な状況に対応する。

それを目指さざるえなかった。

ただそれだけを聞いて、リテンスは黙った。

そのまま何をするでもなく、ただ突っ立っている。

正直、そんなところに立たれたままだと邪魔なんだが、気にしないことにした。

剽を奔らせ天剣へと流し込み、神経と筋を通す。

そして自身の体の一部する。

これは鋼系の基礎であるが、他の武器の扱いおも高みへと登らせてくれる技法。

淀むことなく、流れるように型を繋げていく。

刀に始まり手甲、銃、剣、槍、鋼糸、斧、棒、鞭、薙刀、鎖、最後に砲。

十二の武器を、数十の武術を、数百の剽技を繋げ続けて、残心。

残心を解いて、一息。

天剣を待機状態に戻す。

体中から汗が吹き出し、発し続けた剽の残滓が体から湯気のように登っていく。

一息に俺が知っている全ての剋技を繋げるのは、流石に疲れた。

王宮の影へと入ったり仰向けに倒れ、天剣を放り投げる。

乱れた呼吸を整え、そのまま大理石の冷たさを感じていると、影。

女性を魅了するためならばどれだけでも柔らかくなる目が、無遠慮に俺を見下ろしていた。

「トロイアット」

「名前の後に”さん”を付ける、糞餓鬼」

女に見せる甘いマスクに皺を寄せ、愛を囁く口からメリンさんばりに汚い言葉を零した。

「で、なに面白いことしてんの？ しかも旦那まで一緒に」

「天剣の感触を確かめてたんだ。それにリントスはただ突っ立つてただだよ」

「なんだ、俺はてつきりどこぞの馬鹿坊ちゃんに暗殺されそうになつてるから、それに備えて鍛えてんのかと思っただがね」

「あいつの目的はもっと単純明確だろ」

「知ってるよ。てか、知って無い奴、天剣にいないだろ。箱入りつてのも考えものだよな。あれで目的が達成できると思ってるんだから。」
知ってるか？ 俺と旦那を毛嫌いしているルイメイのおっさんだつて、呆れた顔をしてるぐらいだからな。で、俺たちは何かするのかい？」

トロイアットの視線がリンへと向く。

リントンスはトロイアットに目線も向けずに、ただ一言。

「なにも」

「マジで。俺たち出番なし？」

「ああ」

「そいつは重畳だ。女のベッドで寝てればいいなんて、こんなありがたいことはないね、涙が出てくる。お前もそう思うだろ、御曹司」

わざとらしく手を広げて喜んでいたトロイアットが、急に俺に話を振ってきた。

「くだらないね」

「んじゃあ、なに？ お前さんも革命とかに情熱を傾ける口か？」

「それこそまさか。俺は今のベストな状態を維持したいよ」

女王の座にアルシェイラが座り、天剣が十二本総て揃い、そして俺には 守るべき存在が出来た。

グレンダンという、大きすぎて手に余り、そしてあやふやなものはなく、だ。

だからこそ、この状態が続けばいいと思う。

「あいつらは、なに考えてんのかね？」

反乱を企てているミンスに協力する天剣が三人もいる。

なにを考えているのかなど、確りとした付き合いがあれば、協力者の名前を聞くだけで察することができる。

「四人だけ、四人。どんだけーって感じだよ、まじで」

確かに。

たった四人でアルモニス家に 正確にはアルシェイラに喧嘩を売るとか、命知らず過ぎる。

『汚染獣が接近しています。老生体二体。戦闘域への到達は二日後くらいですわね』

落ち着いた、老婆の声。

まるで日向ぼっこをしながらまどろんでいるかのような、のどかさ。

廊下の天井付近に念威端子が浮いていた。

声は、刀自のものだ。

『そうですねえ、お昼には到達するでしょうか？』

誰かが質問を飛ばしたのだろう。

端子の声は変わらずのんびりとしたものだが、天剣の誰もがその情報を疑わない。

それほどまでに刀自の念威は凄まじい。

『ランチは早めに済ませておくべきですね。駄目ですよ、ちゃんと食べないと大きくなれません』

質問したのは女性陣の内の誰かだと特定できる返答。

そしてそのまま刀自の良い女性になる為とは、という講義は始まる。

その一方通行な話を聞きながら、欠伸。

「まゝた、カウンティアがやり込められてるな」

背後でトロイアットが苦笑を洩らす。

『はいはい。戦闘区域は外延部北西十キルメル周辺となるでしょう。よろしいですか?』

それはアルシエイラへの確認だろう。

『はい、分かりました。では、リントンスさんを後詰にツヴァイさんが出勤ということぞ。』

リントンスさん、ちゃんとフォローしてあげてくださいね。それにツヴァイさんは、折角、正式に婚約者が出来たのですから確りとお働きなさい』

「言われるまでもなく」

『はい、良いお返事です。彼女を貴方の許嫁にしては、と進言して正解でしたね』

しかし、と刀自は続ける。

『イクティノスさんのお見舞いに行かないのは、減点ですよ』

「いや、女性の見舞いには出来るだけ行かないほうがいいかと思いまして」

『何故です?』

「化粧をしていない状態を見られるのを嫌う女性も多いと聞きますから」

病院じゃあ、流石に化粧を四六時中しているわけにもいかないだろう。

俺なりの気遣い、と言ったところ。

『けれど、愛する人に会えないのは、それはそれは寂しいことだと思いますけど……判断はツヴァイさんに任せましょうか』

紹介までが、刀自の役目、とでも言うのか。

それともあまりお節介な真似はしないように自重したのか。

「刀自、妙齡で魅力的な女性にも知り合いがいるのでしたら、ぜひ俺にも紹介してほしいものですね」

『トロイアットさん、あなたが女性を一人にお絞りに出来るのでしたら、とびっきりの美女を紹介して差し上げますわ』

「それは厳しい注文だ」

『では、お諦めなさい。では皆さん、良い戦場を』

そう言い残して、刀自の声が聞こえなくなった。

天井に張り付いていた念威端子が風に乗っているかのように軽やかに舞い、上空へと飛んでいった。

円卓に贅を凝らした料理が並んでいる。

もしこれがグレンダンの一般階級の住民がみたのなら、そのあまりの豪華さに目を剥いただろうというほどの豪華。

主人たるミンスの正面には四人の天剣授受者が並んで座っていた。

「リントンスは抱きこめなかったか」

葡萄酒で肉料理を流し込み、ミンスは苦い表情を浮かべた。

結果は分かっていたことだが、出来うるならば味方としたかった相手だ。

ミンスにとって、現天剣授受者最強という名はそれだけ魅力的であり、恐怖の対象であった。

「だから言ったではありませんか。　奴は外来者。　陛下の手駒ですよ」

言ったのは四人の内の一人。

カルヴァーン・ゲオルディウス・ミッドノット。

五十代を迎えた老齡の男だ。

元は黒かったであろう短く刈り込まれた髪は、苦勞人氣質からか、それとも単純に歳だからか、灰色の髪。

「それよりもこのことで陛下にこちらの情報が漏れることの方が恐れるべきことです」

「その心配は必要ない。あれの性格はわたしの方が心得ている。あれはこちらの意図を読んで、全て受けて立つ」

「そうですね。あの方は力づくでモノを訴えることをグレンダンらしいと笑いそうだ」

苦澁の表情のカルヴァーンとは対照的に、サヴァリスは楽しげな表情を浮かべている。

「サヴァリス。貴様は陛下を相手に勝てるつもりなのか？」

「おや、そのつもりで此処におられるのでは？」

「いや、それは無理だ」

主催者。

ミンスの発言にここに集まった全員がミンスを見た。

全員が全員、ミンスは勝つつもりで天剣を集めている。

そう思っていた。

「天剣授受者が四人揃おうと、勝てないかもしれない。その可能性は確実にある」

なのに、この発言。

ただの世間知らずの坊ちゃんだとばかり思っていた天剣たちは、ほんの少しだけミンスの評価を上方修正させる。

「ならば、どうするのです?」

いち早く驚きから復帰したカナリスが、天剣の総意をミンスへと問いかける。

そう、負けるとわかっていて反乱を起こすのは、ミンスの目的に与って致命的だ。

カルヴァーンやサヴァリスあたりは勝ち負けなど関係ないのだが、

他の面子にとっては致命的。

「なに、正攻法が駄目なのなら、絡め手を使えばいいだけのこと」

「糞勿体ぶらずに言え、糞御曹司」

バーメリンの言葉に一瞬、ミンスの眉が上がるが、耐えた。

口が悪いのは、誰もが知っていることだったから。

「女王が駄目なら、アレを狙う。アレは女王のアキレス腱だからな」

「あの方を、ですか？」

「それはそれで難しそうだ」

「あれの気質など、それこそ我々が一番把握している。だから心配はいらない。なあ、クラリーベル？」

円卓に座る、最後の一人。

クラリーベル・ロンスマイアが静かに、頷いた。

道化は踊る。

01 (後書き)

新章突入！

arcadiaではここまで更新してたんだけなあ。

ということで次の話からようやく新しく書いた話になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4795t/>

Re:write

2012年1月4日07時48分発行